

静岡文化芸術大学

第8回多文化子ども教育フォーラム

# ブラジル人保護者は 何を考えているか

## 報告書

日時：2014 年 6 月 14 日 （土）

場所：静岡文化芸術大学 南 281 中講義室

主催：静岡文化芸術大学

編集

池上重弘、イシカワ エウニセ アケミ、上田ナンシー直美

2016 年 2 月

このフォーラムは、2014 年度静岡文化芸術大学 学長特別研究（研究代表：池上重弘）  
「多文化共生をめぐる地域課題の解決に向けた実践的研究」の事業の一環として行われました。

# 第6回多文化子ども教育フォーラム ブラジル人保護者は何を考えているか

## 目次

### シンポジウムの記録

第一部 報告	・・・ 1
池上重弘（静岡文化芸術大学教授）	
上田ナンシー直美（静岡文化芸術大学准研究員）	
宮城ユキミ（静岡文化芸術大学国際文化学科3年）	
イシカワ エウニセ アケミ（静岡文化芸術大学准教授）	
柳沢クリスティーナ	
谷丸アンナ由貴美	

第二部 質疑応答	・・・ 11
----------	--------

### 資料

趣旨説明（池上重弘）	・・・ 17
「バイリンガル絵本プロジェクト」から見えてきたもの	
～ブラジル人大学によるブラジル人児童家庭訪問調査報告～	
（上田ナンシー直美）	・・・ 20
映写資料（上田ナンシー直美）	・・・ 25
集計表（上田ナンシー直美）	・・・ 33
写真	・・・ 42
アンケート自由記述	・・・ 44
チラシ	・・・ 47
関連新聞記事	・・・ 48



## 第8回多文化子ども教育フォーラム（2014年6月4日開催）

### 第一部 報告

#### 池上

皆さん、こんにちは。本日は多文化子ども教育フォーラムにお越しいただいて、誠にありがとうございます。それではこれから第8回多文化子ども教育フォーラムを進めてまいります。私はこのフォーラムを主催しております静岡文化芸術大学の池上重弘と申します。私が今日話すのは本当に冒頭だけで、後は基本的に全てブラジル人の女性たちによるお話を聞いていただきたいと思います。このフォーラムに既に何回もお越しくださった方がいらっしゃると思いますし、今回はじめての方もいらっしゃるかもしれませんので、少しこの多文化子ども教育フォーラムの話をしてから、本日のポイントをお知らせしていきたいと思います。

「多文化子ども教育フォーラム」という名前でネット検索していただきますと、私のホームページの画面に出ます。この画面から各回の資料、当日配布資料などをダウンロードできますし、その場で見ていただくことも可能です。いずれにしても第1回が2012年の6月2日、2年前ですね。2012年度に4回行いました。参加者は必ずしも同じメンバーではなかったですが、課題を共有しながら、外国につながる子どもたち、あるいは外国人の子どもと一緒に学んでいる日本の子どもたちの教育において何が必要かということをも市民の立場で検討してまいりました。第4回、2013年2月13日には当時的高木教育長にもお越しいただいて参加したメンバーとゆるやかに合意できると思われる点を提案としてまとめて教育長にお届けしました。昨年度2013年度はフォーラムの二年度目ということで、ちょっとテーマの焦点を絞って進めてまいりました。

皆さんのなかにはおそらくいろんな現場で外国籍の子どもたちや外国につながる子どもたちの課題について日々取り組んでおられる方が多いと思うのですが、ここ数年、少なくとも本学においてはとても良い変化が起きています。それは、日本人と全く同じ試験を突破して本学国際文化学科に入学してくる外国籍の学生たちが数名コンスタントに現れていることです。誤解のないようにもう一回強調します。留学生試験以外の外国人入試の枠、外国籍特別の枠は本学にはありません。あるのはセンター入試だったり、推薦入試だったり、あるいは英語推薦という枠で、日本人も受ける入試枠です。合格した外国につながる学生たちのなかには、ブラジルの子供たち、あるいは中国の子供たち、そして今年は南米コロンビア出身の子どももいました。そういった学生たちが本学に入学してくる、こういう新しい変化がここ数年継続して起きています。今の四年生に2人、今の三年生に5人、二年生にも5人、一年生には中国を入れて6人が毎年定員100名のところに入ってきています。

そういった学生たちは非常に熱心に自分たちの後輩たちにコミットしており、学習支援や交流支援などに深くかかわっています。昨年度(2013年度)の6月22日には教育支援策をめぐって当事者学生がもの申すということで、学生たちが一カ月にわたって検討した内容を皆さんの前で披露し、グループディスカッションをしながら課題を共有し、どんなふうにして大学教育を受ける気になったのか、話をしました。その後、昨年度は絵本プロジェクトを本学で行いました。今日皆さんのお手元にお配りしているA3判の資料の冒頭には、「浜松市における多文化子ども教育フォーラムとバイリンガル絵本プロジェクト」というタイトルの私の文章がありますが、それはこのフォーラムの振り返りと昨年本学のデザイン学部を卒業した金城ジゼレさんが作ってくれた小学校への導入絵本「Escola do Japão em Hamamatsu」(浜松の公立学校)を使ったプロジェクトについて書いてあります。

この絵本は日本語とポルトガル語で書かれたもので、小学校生活を子どもの視点でも理解ができる絵本です。これを昨年度浜松市内の全小学校に配布しました。それからブラジル人の多い19校では全ての家庭に配布して、その際に本学のブラジル人の学生たちが訪問するヒアリング調査に応じてもらえますかという問いかけをしたわけです。その結果43世帯が訪問を快諾してくれて、実際には日程調整の結果、22世帯を訪問しました。詳細については今日、本学の上田ナンシーがお話しします。そういったプロジェクトを本学のブラジル人学生たちが担っていく、そんな新しい動きがでております。

今年(2014年)1月に行った第6回のフォーラムでは、その内容をポルトガル語でお話しする討論会で行いました。本学のブラジル人学生たちが全編ポルトガル語で話をしたわけです。これについては既にその報告書を日本語とポルトガル語のバイリンガルで作成しております。画面のこの多文化子ども教育フォー



ーラムのサイトから当日配布資料、報告書に辿りつくことができますのでそれもお読みいただければと思います。昨年度の最終回 3 月にはこの 4 月からはじまる特別の教育課程に関するお話ということで、文部科学省の検討のかなり内部で関わっておられた豊橋教育委員会の築樋先生にお越しいただきお話を伺いました。

今日はバイリンガル絵本プロジェクトに関する報告がメインになります。家庭訪問調査の結果を詳細にお伝えする、それから実際に家庭を訪問した本学のブラジル人学生、宮城ユキミさんがヒアリング調査について語ります。そして前半のパート 3 では本学のインカワエウニセ准教授がブラジル人保護者の二人、柳沢クリスティーナさん、谷丸アンナさんにお話を伺います。そのうちの一人、柳沢さんは家庭訪問プロジェクトを受け入れてくださった保護者という視点でお話をさせていただきます。また今日はフロアにも家庭訪問プロジェクトでお邪魔させていただいた家庭のお母さんも来てくださっています。

学術調査は多くの場合、研究者が論文を書いて学会発表しておしまいなんですけれども、私たちは浜松でこういった研究をやっていますので、調査結果とそこからの知見をポルトガル語討論会ではブラジル人の当事者にポルトガル語でフィードバックしました。今日は実際に家庭訪問に応じてくださった方々にもお越しいただいて、保護者の方が何を考えているのかという調査結果を日本語でフィードバックします。さらに大学進学を果たした学生もいますし、ブラジル人の本学のスタッフもいれて、後半は皆さんと意見交換をしていきたいと思います。私の話が長くなりましたが、お手元のもう一つの A4 判の資料に趣旨説明があるので、簡単に見ていきましょう。

さきほど申し上げたように本学では最初にブラジル国籍の学生が入ってきたのが 2006 年度です。2008 年度にデザイン学部にも 2 人入ってきました。このうちの一人がバイリンガル絵本の作者の金城ジゼレさんです。しばらく入ってこなかったのですが、2011 年度に 2 人、2012 年度に 5 人、2013 年度は 4 人で、この 2014 年度は先ほど申し上げたように 5 人また入ってきました。そういう変化を私は地殻変動と呼んでいます。日本で高等教育を受ける子どもたちが増えてきているという状況があります。

これがさきほど紹介した金城ジゼレさんの絵本の表紙です。内容はこんな感じで、給食に関しては柔らかいタッチの絵にポルトガル語と日本語のバイリンガルで説明が書いてあります。日本の小学校を楽しめるようにしてあります。ブラジル人の卒業生が作ったバイリンガル UD 絵本をブラジル人の在校生たちがブラジル人の小学生に「想いのボタン」として届ける。私はこれを、UD 絵本を持ったロールモデルのデリバリーと表現しました。この家庭訪問調査の結果を今日は皆さんにお伝えします。

これは家庭訪問調査を始める前の記者会見の様子です。たくさんメディアが来てくれました。その後 NHK 静岡放送局もテレビのニュースで様子を取材して報道してくれました。こちらは 1 月のポルトガル語での討論会の様子です。この時は在浜松ブラジル総領事館のピラス総領事がはじめから終りまでずっと話を聞いてくれました。私は失礼であることを承知で、最後の挨拶でピラス総領事に対し「私たちは大学の立場で今日このポルトガル語の討論会を主催しました。ここから先はブラジル人コミュニティがこれをどう受け止めるか、ブラジル人コミュニティ側でぜひ考えてほしい」という宿題を出しました。このような動きが昨年度後半にありました。それではその結果をこれから皆さんにお話したいと思います。それでは本学の准研究員の上田ナンシー直美から報告いたします。

## 上田

皆さん、こんにちは。静岡文化芸術大学の准研究員の上田ナンシー直美と申します。ブラジルのサンパウロ市出身の日系 2 世です。池上先生に紹介された絵本プロジェクトについて報告したいと思います。よろしくお願いします。

まずは絵本プロジェクトの調査方法についてお話しします。浜松市の教育委員会の協力を得て市内でブラジル人児童がもっとも多く在籍している小学校 19 校を教えていただき、このリストをもとに 2013 年の 9 月から 10 月にかけて各学校を訪問して、実家庭数の絵本を届けました。家庭訪問調査の協力者の連絡先を得る際に小学校の先生方に負担をかけないようにどうすればいいのかを相談しながら考えたのが、絵本と一緒に保護者に家庭訪問調査の協力依頼書を配付することでした。この方法で 363 世帯に絵本と調査協力依頼書を配付しました。それと合わせて 10 月 5 日には教育委員会主催の入学ガイダンスに出席した 16 名のブラジル人保護者にも絵本と調査の協力依頼書を配付しました。10 月末の締め切りまでに小学校から 38 名の協力者の情報が本学に届きました。入学ガイダンスの 5 名の協力者と合わせて合計 43 世帯のご家庭から協力を得ることができました。11 月上旬から電話でアポ取りをはじめたのですが、実

際に電話で話してみると、「今は忙しいから調査の協力を辞退したい」と調査を断る方がいたり、1 ヶ月間の限られた時間の中で学生たちと訪問先のスケジュールをマッチングしたりするのが難しかったため、最終的に学生たちが訪問したのは 22 世帯でした。

この 22 世帯のブラジル人児童の小学校の学年を見ると、6 年生が 5 名、5 年生が 2 名、4 年生が 3 名、3 年生が 4 名、2 年生が 2 名、1 年生が 4 名と、就学前の児童が 2 名でした。学生たちが家庭を訪問した際の調査項目は家族形態、出身地とブラジルでの生活、来日歴と日本での生活、仕事の状況、子どもとの関わり方、バイリンガル絵本の感想、子どもの教育についての考えでした。

データ集計結果を見ていただきましょう。訪問先のご家庭では主にお母さんの方が回答してくれたのですが、場合によってはお父さんとお母さんの 2 人がその場で一緒に回答したものもあるので、回答者数は合計 33 名になっています。後半には世帯の回答のみを示した 22 世帯という度数が出てきます。

まずは保護者 33 名のデータについてです。性別は女性が 21 名、男性が 13 名でした。出身地についてはサンパウロ州が 20 名、パラナ州が 4 名、リオ・デ・ジャネイロ州が 3 名、その他が 6 名でした。保護者の最終学歴については 17 名が高校卒業で、中学校を卒業した方が 8 名、中学校を中退した方が 3 名、そして大学を卒業した方が 2 名いました。ブラジルでしていた仕事については事務系が 12 名、職歴なしが 7 名、営業職が 2 名、車関係が 2 名、手芸が 2 名、その他が 7 名でした。職歴の経験がないと回答したほとんどの方については、ブラジルで仕事についていなかったのではなく、子どもの頃にご両親と一緒に来日したという方です。

来日前の日本語学習経験については、23 名の方が学習したことがない、10 名の方が学習したことがあると答えました。来日前の日本語力は全くゼロが 23 名、家庭内の日常会話が 3 名、簡単なあいさつが 3 名、ひらがなの読み書きが 2 名、ひらがなとカタカナの読み書きが 2 名でした。

ブラジルでの生活についての最後の質問です。ブラジルの日系人コミュニティとの関係について、まったくつきあいがなかったと答えた方が 17 名、たまにつきあっていたが 9 名、あまりつきあいがなかったが 4 名、よくつきあっていたが 3 名でした。日系人ではあっても、ブラジルにいた時は、必ずしも日系人コミュニティと親密な関係を持ったり、日本の文化にふれたりしていたとは限らないことがわかります。

続きまして、日本での生活についての質問です。初来日については、ほとんどの方が 1990 年代に来日していました。日本での滞在通算については「16 年～19 年間」が 13 名ともっとも多く、ついで「12 年間～15 年間」が 11 名、「20 年以上」が 7 名、「11 年未満」が 1 名でした。今回の絵本プロジェクトの回答者は、滞在期間が長期にわたる方だということがわかります。

来日後の日本語学習については、日本語を学習したことがあると答えた人が 24 名で、学習したことがないと答えた方は 9 名でした。

来日後にしてきた仕事については、保護者のほとんどの 32 名が工場労働を経験したと回答しました。現在は 24 名の方が工場労働に従事しています。

これからは 22 世帯のデータを紹介します。訪問したご家庭の家族構成についてもっとも多かったのがお父さん、お母さん、子ども 2 人の 8 世帯、お父さん、お母さん、子ども 3 人の 5 世帯、お父さん、お母さん、子ども 1 人の 3 世帯、お母さん、子ども 1 人の 2 世帯でした。

日本社会の情報源については自治会の回覧版から情報を得ると答えたのが 14 世帯でもっとも多く、次いでブラジル人の知人が 13 世帯、浜松市の広報が 10 世帯、フェイスブックと日本のテレビがそれぞれ 7 世帯ずつ、そして子どもの学校、日本人の知人、インターネットがそれぞれ 6 世帯ずつでした。

保護者から見た子どもの言語についてです。子どもの日本語力についてもっとも多かったのが「読み書きも含めて問題ない」と答えた 16 世帯で、次に「日常会話は問題がないが、学力に問題がある」と答えたのが 4 世帯でした。子どものポルトガル語力については、「読み書きも含めて問題ない」が 3 世帯、「日常会話はできるが、日本語の方が得意」、「話すのは問題ないが、読み書きに問題がある」、「少しだけ理解できる」がそれぞれ 7 世帯ずつでした。

両親が子どもと話す言語はポルトガル語のみが一番多くて、15 世帯でした。保護者が子どもと接する時間については、平日の夜と週末が 13 世帯で平日の朝と夜と週末が 5 世帯、そして主に週末が 3 世帯ということだったのですが、平日の朝と夜の短い間でも子どもと接しているという回答がありました。

学校行事への参加については「全て欠かさずに行く」が 12 世帯、「ほとんど行く」が 8 世帯、「ときどき行く」、「配偶者と交替で行く」がそれぞれ 1 世帯ずつでした。今回の家庭訪問調査では子どもとの接触や学校行事に比較的積極的に取り組んでいるということがわかります。

子どもの宿題については「可能な範囲で見てあげる」が 7 世帯で一番多かったです。次いで「見てあげるが、算数や理科はあまり見てあげられない」と「全部見てあげる」がそれぞれ 4 世帯ずつ、「あまり見てあげない」が 3 世帯でした。

絵本の読み聞かせをしているかどうかの質問については「はい」と答えたのが 15 世帯、「いいえ」と答えたのが 7 世帯でした。このように学習面のサポートや情操教育では十分に対応できていない部分があるということがわかります。

バイリンガル絵本の感想について、ほとんどの保護者からは良いという感想をもらいました。「内容が良い」と答えたのが 16 世帯、「入学時に役立つ」が 10 世帯、特に小学校 1 年生に上がる前の段階でもらうとすごく役立つという回答がたくさんありました。その次に「デザインが可愛い」が 5 世帯、そして「バイリンガルである」、「ブラジル人学校から編入する際に役立つ」という回答もありました。

絵本の改善すべき点については「親への情報」が一番多かったです。絵本は子ども向けの内容が多かったのですが、保護者としては保護者が知るべき内容をいれてほしいという回答がありました。その次に教科書の説明、文化の説明、国際教室、特別学級などの回答もありました。

子どもの進学への期待についてはほぼ半数の 10 世帯が「国を問わず、大学に進学してほしい」と回答しました。その次に日本の大学に進学してほしいと回答したのが 6 世帯でした。やりたいことをやってほしいという回答も 2 世帯ありました。

次は進学への課題、特に日本の大学に進学する場合の課題です。回答が多かった順に、経済面が心配、子どもの学習力が心配、親が日本語がわからないため必要な情報が得られない、日本の教育制度がわからないという課題でした。

子どもたちが現在通っている日本の学校についてわからないことについて、一番多かったのが学校生活やルールがあまりわからない、PTA活動があまりわからない、いじめの問題がよくわからないなどという回答でした。

この家庭訪問調査を実施した後に保護者と学生が意見交換をする場が設けられました。その時に保護者の方が学生にした質問が次のような質問でした。

- 「いつから日本の学校に通っているのか」
- 「高校に入学するためには試験があるのか」
- 「浜松市の高校はどう選ぶべきなのか」
- 「勉強方法はどうだったのか」
- 「言語の運用能力はどうなのか」
- 「大学の入試方法はどうだったのか」
- 「大学進学で困難だったことは何だったのか」
- 「大学でかかる費用はどのくらいなのか」
- 「奨学金はあるのか」
- 「日本の学校でいじめを受けたことはあるのか」

家庭訪問調査が終わった後に、学生たちは教員に報告書を提出したのですが、学生たちからの感想をいくつか紹介します。例えば、「父はとても教育熱心で、子どもたちの教育のことをよく考えていそうだった」、「非常に教育の環境が整っていると感じた。子どもを手伝う体制が整っていて、素晴らしいと思った」、「母は教育熱心で、日本の教育には好印象を持っている。子どももその影響を受けてか、進学に対して前向きな気持ちを持っている」。今回の家庭訪問に協力してくれたブラジル人ご家庭が比較的教育熱心だということは学生たちが書いた感想からも伝わってきますが、そうでもない家庭もありました。例えば「ブラジルへ帰国したい家族のせいか、そこまで訪問に興味を示さなかった。また、教育に関しても、あまり熱心にしていなさそうだった」という学生の感想もありました。

それでは、最後にこの家庭訪問調査から少し見えてきたものについて紹介します。教育熱心な保護者が多かったのですが、ヒアリングに応じてくれた保護者 33 名のうち、大学進学を果たした保護者は約 2 割で、大学を卒業したのはわずか 2 名 (6%) でした。それでも保護者の約 8 割は子どもの大学への進学を願っています。その中のある保護者は「工場で働く自分の姿を見せ、娘がそうならないように勉強するよう励ましている」と言いました。

この調査のまとめとして、日本の大学進学への課題として挙げられるのが、子どもの宿題をあまり見てあげることができない、特に算数のやり方はブラジルとは違うので、算数、理科や国語は見てあげられない。



そして大学でかかる費用が心配、日本語がわからないため、子どもの進学についての情報が得られないというのが課題として挙げられています。特に最後のあまり情報がないという点については、たぶんポルトガル語で色々な情報が翻訳されているとは思いますが、必要としている方に届いていないかもしれないということもあります。

私の方からの報告はこれで以上です。ありがとうございました。

## 池上

ありがとうございました。前半は家庭訪問調査の回答者の属性、後半は親御さんがどんなことを考えているのかという報告をさせていただきました。今回のサンプルは 22 名と少ないのですが、この調査の趣旨を改めて私の方からもう一回確認したいと思います。ブラジルの人たちの数が減っているというのは皆さんご承知のとおりで、ピーク時の 33 万人が今およそ 20 万人くらいですね。一方、日本全国でみると残っているブラジル人の 60%は永住ビザを持っています。

そしてしばしば言われているように定住志向が強く、または子どもたちの多くが日本の学校に通っていて、高校に行ったり、最近では日本の大学に入ったりする子どもたちもわずかだけれども確実に増えてきている。親御さんの中には子どもを大学まで行かせたいと思っている人たちもいるのですが、それではそういうブラジル人の家庭はどんな家庭なのか。親はどんな仕事をしていて、子どもの将来に対してどんな希望を持っているのか。子どもたちは家の中ではどんなふうに教育を受けてきたのかということについて明らかにしたいことがこの調査の趣旨です。ですから浜松市内全域に調査票をばらまいて集めるのではなくて、むしろ大学が行うヒアリング調査で「関心を持っている」、もう少し言ってみると、「大学生に家に来てもらいたい」と思うような親御さんたちが本当にどんな状況なのかを調べてみたいということでした。

これは単なる調査ではなくて、ある種の実践的な活動でもありました。さきほど私はロールモデルのデリバリーという表現を使ったのですが、大学まで進学したブラジル人の学生と子どもたちの大学進学を希望する親が接する場はなかなかありませんでした。そこで学生が実際に外に出ていくことでその姿を見てもらいたい、親御さんに実際に大学に進学したブラジルの学生をその目で見てもらいたいと考えました。我々の側からのヒアリング調査が第一の目的でしたが、実は親御さんの質問に学生たちが答えるというのも重要なパートでした。二つ目は子どもたちがロールモデルと接触することです。自分と同じ背景を持って、日本の高校へ行って日本の大学に進学したそういったお兄さんお姉さんを子どもたちに見てもらえば、おそらく子どもたちにとって学びの大きな原動力になるのではないかと考えました。そして実際に回ってくれた学生たちにとっては、自分が持っている背景、日本とブラジルにつながって生きていること、日本の教育を受けたこと、そうした経験をポルトガル語で伝えられることが、社会において非常に役に立つのだということを感じる機会になりました。いわば、エンパワーメントの機会だったわけです。

親にとっては、子どもたちと同じ環境で育ちながら大学に進学した、そういう子たちと接する機会。子どもたちにとってみれば、ロールモデルである大学生のお兄さんお姉さんに直接会って勉強の動機付けになる機会。そして学生たちにとっては自分たちの持っている背景がこういう形で社会に役立つのを自覚するというエンパワーメントの機会。この三つの機会として今回のプロジェクトを行いました。

それでは次に、実際に家庭訪問調査に回った本学国際文化学科 3 年の宮城ユキミさんから、その時の様子、印象を語ってもらいます。

## 宮城

こんにちは。実際に家庭訪問を回った学生の一人の宮城ユキミと申します。今回はブラジル人学生合計 6 人で回って、2 人 1 組になって平日の夜と土日を使ってご家庭を訪問しました。私は実際ヒアリングという調査をやるのははじめてで、かなりドキドキしながら、「えっ、こんな質問まで聞くの」と思いながらやってきました。あとは自宅が見つからなかったり、スマホの住所表示がかなり違ったりとかいろいろありました。主観的になってしまうかもしれませんが、私からは 4 点、今回の家庭訪問調査で感じたことを話していきたいと思います。

一つ目は保護者間の意識の差です。今回は訪問件数がさほど多くなかったんですが、多くなかったからこそ逆に目立ったのが、あまり教育に関心がない、ブラジルに帰るから今は別にどっちでもいいという家庭でした。少なかったからこそ目立った、私の中では印象に残ったのだと思います。来月とか、もうすぐブラジルに帰るから今は別に学校に通わなくてもいいとかという保護者は実際にいました。逆に関心をすぐ

く持っている家庭の中でお母さんが実際に日本での教育を受けていないから算数とか見てあげられないというのが実際にありました。ブラジルの算数の割り算の筆算は日本とは逆になっているので、私は実際に日本のやり方の方がわからなくて、自分の小さい妹に教える時もよく分からないです。

二つ目が PTA 活動についてです。参加しているけど、実際に何がどういふふうに行われているのかがよくわからないという回答が多かったです。私も小学校 6 年生に日本に来て、中学の時もリサイクル活動の時からにはやってお母さんも参加していました。

三点目は自分の時とは少し状況が変わっているというふうに感じたことです。私が日本に来たのは 2005 年、9 年前です。私が来た時は本当に日本語がわからなくて、通訳を入れたりとかということが多かったんです。今回は兄弟がいる関係でなんとなく学校はどういふふうなのか、ブラジルの学校とは違うんだという意識はありました。もう一つはバイリンガルの絵本を使ってお母さんが日本語を覚えるだけではなくて、子どもがポルトガル語を覚えるというのが実際にありました。教科書はポルトガル語ではこういうふうに言うんだよと、逆にお母さんが子どもに教えてあげられるツールとしてなっていたことが、今回の調査とは関係なく新たな発見だったと思います。

最後の四つ目はロールモデルがいるということです。今回訪問した家庭は小学生が多かったんですが、実際にお姉さんが大学生だったりとか中学生のお姉ちゃんがいったりするとか、なんとなく学校のシステムがわかっている親も多かったんです。あと、近所の顔見知りの団地に住んでいる方もいて、あそここの棟に住んでいるお姉さんが大学に通っているということ知っているよと教えてくれた保護者もいました。

以上で四点になります。回っていて思ったことが調査をやっていて、「以上になりますよ」と IC レコーダーを切った瞬間、いつ日本に来たのなど、いつも質問攻めにありました。どうやって日本語を覚えるのかと質問してきたり、大学では奨学金を受けているというけれど、それはブラジル人でも大丈夫なのか、銀行から本当にお金が来るのかとか、返す時はどういふふうに戻すのかという質問が多々あって、こういう情報もすごく大事ななと思いました。私からはこれで以上です。

## 池上

ありがとうございました。宮城さんは小学校 6 年生の時に来日したんですね。彼女は小学校課程をブラジルでやって、日本に来ました。実はさきほど皆さんに少し紹介したこの配布資料の A3 判の一番後ろの 20 ページ目を見てもらいますと、宮城さんが『国際人流』という雑誌に載せた文書なんですけれども、その中で NHK の取材を受けた時の写真があります。

今回この絵本プロジェクトを行うとともに NHK 静岡放送局が結構関心を持ってくれて 2 回取材してくれました。1 回目はこの絵本を小学校に届けるという場面設定で宮城さんが佐鳴台小に行った時でした。実は佐鳴台小にナンシーさんが最初に届けに行った時、うちの学生たちの活動が載った新聞記事を持っていったんです。ちょうど 1 年前の 2013 年の 6 月のことなんですけれども、それを見て外国人児童担当の先生が「あっ、この子知っている」と言いました。実はその先生は、宮城ユキミさんが 6 年生で日本語ゼロで来日した時の外国籍担当の先生だったのです。宮城さんがその先生にぜひ会いたいと言ったので、私が再会の場面を設定しました。テレビカメラを入れてみようよと。やらせなんですけど、トントンとノックして教室の扉を開けて、先生と宮城さんが「うわあ〜」と再会を喜ぶ。そんな場面を映像で流したりしました。先生はびっくりしたんですね。6 年生の時に日本語ゼロで来た子が 6 年生の残り半年の数カ月教えただけで、その後は中学校に行ってどうなったのかなと心配したと思います。宮城さんは浜松市立高校のインターナショナルクラスに進学し、うちの大学にはセンター入試を受けて合格して、そして今はもう学内のみならず、先日は横浜の JICA で講演会に呼ばれたり、こういう記事を書いたりして全国で活躍しています。

もう一つ浜松では国際交流協会が新しい方向に動き出しています。今までは日本人が企画して外国人がお客さんとして何かをしゃべるといふのがあったんですが、今は企画も外国人の第二世代で、宮城さんやインドネシア人の男の子とかが企画をしたりするようになってきました。そうすると客層も変わるんです。以前は国際交流協会のイベントには海外経験のある比較的中高年の日本人が来ていましたが、今は第二世代の人たちの友だちが増えて、日本人とか多国籍の若者が集まってくる。そういう活動の担い手が出てきました。私は彼女のような今 20 歳前後の子たちが例えば 30 歳くらいになって、仕事の最前線に立ったり、子育てをするようになったりする時には、おそらく日本社会はかなり変わってくるんじゃないかなと思っています。

ということで、家庭訪問調査は本学の学生たち 6 名でやってくれて、今日は宮城さんがその代表として話してくれました。質疑応答では、回った学生たちへの質問に対してまた宮城ユキミさんが代表として答えてくれます。

それでは引き続きプログラムの三つ目の意見交換に移ります。本学のイシカワ准教授が司会をして柳沢クリスティーナさんと谷丸アンナさんにお話をいただきます。

## エウニセ

皆さん、こんにちは。イシカワエウニセアケミと申します。今までの報告の中で明確になったことは外国人の保護者がどういう状況で子どもたちの教育に関わっているのか、どういう問題があるのかということでした。数字も出てきましたし、いろんな傾向が明確になったのではないかなと思います。また、学生の宮城ユキミさんの感想も皆さんには新鮮なところがあったのではないかなと思います。後半は保護者である 2 人の方にご登壇いただいて、今度は子どもを日本の学校に通わせる上でどういう問題に直面したのか、何が問題なのか、何がよかったのかを、保護者自身の視点から皆さんにお話ししたいと思っています。

まず 2 人のゲストをご紹介します。柳沢クリスティーナさんは 1994 年に日本にいらして、浜松在住で現在中学校 1 年生の息子さんがいます。日本の小学校、中学校での経験のお話してください。もう一人は谷丸アンナ由貴美さんです。彼女が最初に日本に来たのは 1983 年で、一時日本を離れた時期もありましたが、家族で最後に日本にいらしたのが 5 年前で今娘さんが二人います。高校 2 年生と中学校に在籍しています。柳沢さんと谷丸さんはもちろん日本語ができますし、日本での生活が長いので日本のこともかなり分かっていますが、それでも日本の学校に子どもを通わせる時に様々な問題に直面しているということを、ここで皆さんにお話ししたいと思っています。

さきほどの報告にもありましたように、バイリンガル絵本の改善すべき点というところでちょっと注目しましたが、親たちはまずは日本の文化がわからないので絵本に書いてくれれば便利だなという意見がありました。保護者への情報や教科書の説明などもっとほしいとありましたけれども、そういう観点から柳沢クリスティーナさんと谷丸アンナさんにもお話しをしていただきたいと思っています。

まずは自らの経験の中で日本でどういう問題があったのかについて話していただきたいと思いますが、柳沢クリスティーナさんから日本の学校での体験や問題に思ったことなどの話をしていただきましょう。

## 柳沢

皆さん、boa tarde、こんにちは。私はブラジル人、日系 3 世です。1994 年に来日しました。その時は日本語は挨拶程度でした。日本で結婚して、出産、子育てもして、現在は中学校 1 年生の息子がいます。この話をする前にちょっとバイリンガル絵本プロジェクトに関して感想を言わせてください。ヒアリングの時に私も訪問を受けました。最初に絵本を頂いた時はとてもかわいくていいプロジェクトだなと思いました。それと学生が作成したものはすごく素晴らしいなと思いました。いろいろ仕事で忙しくてなかなか時間をとるのが難しかったのですが、本当は一日だけその学生に来てもらいたいなと私は楽しみにしていました。その絵本を息子に読んで、息子は母国語としては日本語、第二言語としてはポルトガル語、2 人でゲームという感じで、ポルトガル語と日本語で教科書はどういうこと、livros とか言いながら、ポルトガル語と日本語での言い方についていろいろ情報を交換しながら話をしていきました。絵本の内容はとてもいい内容でしたので、息子は当時小学校 6 年生だったので、もっと前にもらっておけばよかったなと思いました。

学生に来てもらいたいと思ったのは、やはり学生と交流をしたいなという気持ちがあったからです。実際に日本の大学に行った学生と交流ができたらいいなと思っていたのですが、なかなかそういう機会がなくて、今回は一つのきっかけとなりました。それともう一つ、学生が来てくれたら、いろんな情報を得ることができるんじゃないかなと考えました。日本の学校で大変だったこと、楽しかったこと、嬉しかったことをいろいろ伺って、いいお話が聞けたと思いました。個人的にコーヒーとボンジケージョを作って出しました。学生はおいしいと言ってくれました。

私は日本に 10 年以上住んでいるのですが、その中でいろんな経験をしました。その様々な経験の中には大変なこともありました。日本人も社会に出て大変なことがたくさんあると思うんですけど、私に関しては外国人だから言葉とか文化の違いとか衣食住の違いとか様々なことを乗り越えていかなければなりません。学ばなければならないこともたくさんあるのではないかなと感じております。



## 谷丸

皆さん、こんにちは。ブラジル人日系2世です。初めて日本に来たのが高校を卒業してすぐの1983年、ほとんどブラジル人には出会えない、ほとんどいない時期でした。しばらく日本に住み、結婚しました。結婚した相手が韓国の人で、2人の娘を日本で出産して上の子が3歳の時にブラジルに帰国して7年間過ごしました。長女は日本語から話だして、次女はポルトガル語から言葉を学びました。日本に戻ってきたのが5年前なんですけども、その前に1年間韓国のソウルで学校に行きました。こっちに来て、すぐ浜松に来て、浜松に来たのもブラジル人の社会が大きくて強くて教育の面でもサポートがあるということを聞いておりまして、長女は6年生の時、9月からの2学期に入り、次女は3年生。2人とも日本語を忘れてしまっていて、下の子はあまり話せなかったのですが、長女はしゃべることができたのですが、ブラジルにいた頃に忘れてしまったので、日本に戻った時はほとんど話せない状態でした。帰ってきて、入った小学校でサポーターの方、通訳の方が付き添いでいました。長女は卒業して中学校に入りました。次女の方はまだ小さいせいか、結構すぐ慣れて日本語もお姉ちゃんより上達するような状況になりました。中学校に入った時も私自身がブラジルの小学校しか経験していないので、日本の学校についてはわかりませんでした。

## エウニセ

時間の制限がありますのでポイントを押さえながら話していただきたいのですが、この前3人で打ち合わせをして、もちろん言葉ができないとか、習慣がわからないとかは一般的に言われていることなんですけど、普通だったら「これはわかっているだろう」と思われがちなところでつまずいたりしてしまうのは何だろうと話し合っ、具体的に一つ話したいテーマとして部活が挙がりました。部活にどういう問題があるのかを、まず谷丸さんに紹介していただきたいと思います。

## 谷丸

娘は小学校6年を終わってすぐに中学校に入ったわけなんですけども、部活がどういうものか、その意義とか目的とかが私自身知らなくて困りました。でも全生徒がやらなければならない、何かを選ばなければならないと聞いて、適当に好きなもの、おとなしそうな、そういうところを、多分皆さんそうだと思いますけれども、あと、楽な方を選んで、うちの子は卓球部に入りました。

私も全然わからなくて、例えば毎日練習があるとか、土日にも練習があるとか、後は他の学校に行って練習試合があるとか、そういうのも全く知りませんでした。高校に入った時に部活の重要性、部活でのその活動というのがすごく響いてくるんだということを、3年生になった時にはじめて聞いてすごいショックでもありましたし、非常に後悔もしました。やはり自分が親でありながらわからないことで子どものサポートができなくて苦しかったです。

娘は公立に入れなくて笹田学園の2年に行っていますけれども、申し訳ないなという思いと、下の子が中学校に入る時は別の形でもうちよつとちゃんと準備しなくてはいけないなと思いながら、6年生でジュニアバレーに入りたいということで、今も現役のバレー部でやっています。そこでショックだったのは周りの子どもの親たちがすごく真剣なことでした。すごい応援にも行くし、学校での練習、土日の練習にも行くし、朝早く起きてお弁当も作らなければならないし、他の学校への送り迎えもするし、こういうのが本当に部活なんだと、二番目の子どもの時に初めてわかったことです。

日本の親御さんは当たり前のように、先生方もそうだと思いますけれども、部活がどういうものでどういふふうにしなければならないのか知っていますが、私は本当にわからなくて、私も日本が長くて日本の文化と接してきたんですけど、部活については全くわかっていませんでした。さっき上田さんと宮城さんのお話にもありましたように、部活が課題と答えたのが1家庭だけなんです。小学校の時には部活というのが頭にないんですよね、外国人の家では。中学校に入って初めてぶつかっていくすごく大きな問題・課題です。私が感じたのは、できたら、例えば小学校の4年か5年くらいの時に、中学校には部活というものがあってやっていたかなければならないんだということの説明がもっとあったらいいなとすごく感じます。

## エウニセ

3人で話したときはもっと話がいっぱい出ましたが、ここでは簡潔にされているんですけども、3人で出た話はやはり日本の社会の習慣、例えば先輩後輩の上下関係、集団行動、そういうところは日本の皆さん

は当たり前に行くことなんですけれども、外国人に部活と言っても、スポーツサークルかな、好きなことを好きな時にやればいいんじゃないという感覚があって、そこで大きなずれがでてくる。家の中でも子どもと親との間でも問題がかなり出てくるのは、中学校に行って部活は皆と一緒にいきたいけど、親は今日は日曜日だから家族でピクニックに行きましょうとか、家族で過ごす時間が大事だからという違う価値観で子どもに接するので、親と子どもの間でも問題が起きてくる。

部活が日本の社会での一つの習慣を学ぶところ、子どもたちが日本の社会に適応していく大事な過程であるということは、おそらく日本人側もそこまで意識しないで、当たり前のことをやっているだけなんですけど、外国人からすると全然わからない。谷丸さんの場合ですと、上の子では失敗したから、下の子には日本人のようにしたいというふうにしているそうです。

次はさきほどの調査にも出ましたが、PTAの話です。一般的に外国人の保護者はPTAには参加しない、子どもの教育にあまり興味ががないという一般的な評判があるんですが、柳沢さんは実際に自分からPTAに参加していきまして、外国人という立場でPTA活動に参加する時にどういう問題があるか、自分たちがやりたいことと日本の学校のPTAで外国人に期待されているものの間にはずれもかなりあるので、その体験を踏まえてちょっとお話をさせていただきたいと思います。

## 柳沢

私は子どもの小学校1年生から学校のPTAに外国人として参加しております。最初は1年生ですから本当にわからない状態で入りました。正直何をすればいいのか、どういうことをすればいいのか全く分かりませんでした。戸惑うことが多かったんですけど、最終的にその場へ行ってそこにいればいいんじゃないというふうに思いました。日本人の間にちょっと入ってそこにいだけでいいんじゃないかなとちょっと様子をみようかなと最終的に思いました。

その小学校では20年前からPTAの外国人委員があつて、国際交流イベントをとおして日本人の親と料理教室をやったり着物の着付けをやったり交流を果たしていたんですね。そのイベントを企画するために熱心な日本人の親たちの他に、外国人の親もいました。ブラジル人だけではなくてその中にはペルー人、中国人が入っていました。夜7時～8時30分までの時間を1ヶ月に1回もしくは2回の時もありましたけど、ただそこに行ってポツンと参加するのがなんかつまらないなと思いました。最初は難しかったんですね。日本人の保護者がただ報告をして、私たちはいったいいつ話の輪に入ればいいのか、何も言っではいけないのかなと正直いうと控えめでした。

でも、せっかくそこにいるのだから少し参加しようと思ったんですね。そのグループの中に外国人部があつて、机がちょっと離れていました。最初は私を感じたことなんですけど、そこでその会長が話していたことはよく「外人」、「外人だ」とか、なんか耳に可愛くなかったんですね。何だかわかりませんが、差別ではなかったと思うんですね、よく言葉はわからないんですけど、そういうことはあまり可愛くなかったの、他の人も言いづらかったのです、その場では。「外人は公園で〇〇」、「外人側は？」と聞かれても分からなくて反応がなかったのこちらには意見がないと思われたことも多かったかもしれません。ただ、やはり外人という言葉に関して、その時はちょっと我慢できなかったのですね。あまりにも外人という言葉が多くて、ちょっと手を挙げて、実は「外人」ではなく、「外国人」と言ってくれませんかと言って、もしかしたら田舎の方では「外人」と言うかもしれないんですけど、やはり他のところではもう「外国人」と言っているのだから「外国人」の方がいいんじゃないのかな、私たちもここに参加しているんですけど、本当は意見交換ができた方がいいなと、その場でちょっと自分の意見を言ってみました。

その後、当時の会長から電話があつて、「申し訳ありませんでした。『外人』とずっと言っていましたけど全然気付かなくてごめんなさいね」という話がありました。それから次もできるだけ意見も出していただきたいという話が来ました。

料理教室とかで国際交流をしようというんですけど、集まって食べてワイワイとダンスして終わりというのではなく、やはりなんかきっかけがないといけないというふうに思いました。どういふきっかけを作って輪に入れるのか、日本人の方も呼び寄せて向こうからどういふものを買った方がいいとよく言われていたんですけど、買った方がいいのではなく、やはり皆で買い物へ行って何かやりましょうと提案しました。劇も私けっこう好きで計画していたんですけども、その時に劇で日本語もあまり得意ではないから、それでは日本人は日本語でいう、ブラジル人はポルトガル語で言うのはどうですかとか、という感じで日本人の中でも珍しくポルトガル語を勉強している保護者がいたのでその方にはポルトガル語で話してねという役を与えた



んですね。そうやって少しでも感じてもらいたかったんですね、私たちの気持ちを。

国際交流が終わった後に外国人代表の方と日本人の代表の方にちょっと話をしてもらうんですけど、会長にも話してもらって感想を聞きました。その日本人の保護者の方はこういうことを言っていました。「外国人の親も教育熱心だね。日本人と変わらないね」と。もしかしたら外国人差別意識があったかもしれませんが、その時は同じ保護者の立場で同じ悩みがあって、同じ体験できて楽しいと思ったんじゃないのかと思いました。その時にはもっともっと接して取り組んでいかなければならないんだと思いました。

もう一つは先生、校長先生の力もあったんですね。ポツンといた時はなかなかものが言えなくて、手を挙げて少しだけ言ってみても輪に入るのは難しかったです。すごく難しくてどうやっていけばいいのか、本当にくじけそうなことがたくさんあって、その途中で「それでは、さよなら！」ということもありましたが、外国人の担当の先生もたまにそのミーティングに出てくれて気付いたと思うんですね。その時にその先生が少し話しかけていたんですね。日本人の方はどうですか、外国人の方はどう思いますかというように、少しきっかけを作ってくれていました。そうしてきっかけを作ってくれたからこそ私たちはみんなと一緒に過ごすことができるようになりました。校長先生もお話しするときに皆はどう思いますか、外国人の方々はどう思いますかと声をかけてくれました。公園で外国人がよくいろんな落書きをしているという話もしていましたけど、その時にはどう思いますかと話を振ってくれたので、日本人だけでなく、必要だったら外国人の保護者たちも集めてパトロールしますよとお話しました。

やはりお話しする時に言葉の問題とか習慣とかちょっと文化の違いもあるので、ちょっと近づきにくいかもしれませんが、一つだけお願いしたいです、日本人と一緒に行きたいと頼みました。外国人だけの部が行ってそこで話しかけるのではなくて、日本人の方も一緒に交わっていきましょう。そうであれば私行きますよ、協力しますよと言いました。そこでお話ししている間にすごく向こうの方もどうしてそんなに落書きするのか、公園でボール遊びするのか、してはいけないのにどうしてするのかとよく分かるようになりました。ブラジルではよく公園でボールをやるんですけど、ブラジルではあまり気にされていないんですけど、公園で禁止されているところもあるので、というふうに話しをすると向こうも分かってくれたんですね。そこに一緒にいた保護者もわかってくれたのではないのかと思います。

## エウニセ

もう一つのテーマは、すでに日本の学校に通っている外国人の子どもに先生が良かろうと思って新しく入ってきた外国人の子に通訳を頼んでしまうこと自体が、逆に頼まれた子どもにとっては非常に負担になっているということです。谷丸さんにそうした経験がありましたので、紹介していただきたいと思います。

### 谷丸

下の子が小学校 5 年生の時に他の市から編入してきたブラジルの子がおりまして、ちょうどうちの子のクラスに入ってきて、先生からも、校長先生からも「頼むね」、「助けてあげてね」と言われ、わからないことを教えてあげたり、頑張りました。親の私としては友だちながら頑張ってね、ちゃんとやさしくしてあげてねという感じで言いましたけれども、それが子どもにとってはプレッシャーで重すぎる責任になったんだというふうに感じます。

今年中学校 2 年生で全く日本語が話せないブラジルから来た子がまた同じクラスに入ってきて、うちの子どもはまたそう言われたんですけども、今回は子どもは「嫌だ」、「やりたくない」とはっきり言いました。教室や学校ではあまりポルトガル語を話したくないんですね。上手にポルトガル語を話せるのに、話したくないというのは、5 年生の時も今回もそうだったと思うんですけども、子ども自身が必死なんですね、日本人の子どもたちと一緒にいたい、遊び時間はわずかしかなないのでその時間は自分の友だち、部活の友だちとかの輪の中に入っていたい、他の子どもの面倒を見きれない、嫌だということを今回経験しました。

ですから、新しくクラスに入ってきた友だちの世話役を依頼されるのはプレッシャーと重すぎる責任かなと親としては感じます。実際に娘たちも日本に来た時は日本語を話せなかったもので、他の子どもにそういうプレッシャーをかけてしまったという面もあります。お姉ちゃんの方は友だちにいつもついて一緒について回っていたんですけど、その行為はすごく迷惑をかけたのかなと今は思いますね。

## エウニセ

もう一つお話ししたいのは、外国人の保護者が子どもを学校に入学させると、学校によって態度が全然

違う点が一つの大きな問題ではないかということです。たまたまいい先生にあたった、たまたまいい校長先生にあたったという場合は、外国人の子どもにしても保護者にしても問題なくその学校で勉強なり習慣なり文化なり適応できるんですけども、そうじゃない場合にはかなり問題があります。こういうふうに運命に任せていると、いろんな外国籍の子どもが問題を抱えてしまいます。それがもう一つの大きな課題であるのではないかなということも、私たちの打ち合わせでは出ました。これで第一部を終了いたします。ありがとうございました。

## 【休憩】

## 第2部 質疑応答

### エウニセ

宮城ユキミさんに質問がありましたので、それをまずは答えていただきたいと思います。

### 宮城

質問ありがとうございました。一般の保護者の子どもたちの努力に対する姿勢に大きな隔たりを強く感じていますということをしていただきまして、保護者を動かすことが難しいとなるとそのような子どもたちにどのような支援が有効だと考えていますかという質問でした。正直言うと、私は未だにわかりません。私も取り出し教室で日本語をひらがな・カタカナから覚えていったり、中学校の時には月曜日と水曜日の放課後に言葉の教室というのがあって参加していました。そういうところに行って、日本語を覚えるというやり方がありましたが、すごく個人的なものになっていて、その子その子に合っているかどうか問題ですし、制度がちゃんと整っているのか、先生のやり方が正しいのかも問題です。私もどのような支援が有効だかを実は研究していて、どのように制度を整えれば子どもたちの進学率が上がるのかを常に考えているのですが、どのようなものが適切かはまだわかりません。ありがとうございました。

### エウニセ

次は保護者の報告に関してです。外国籍の子どもが教育の問題で相談できる場所が実際に必要なかどうか、必要であるとすればどのようにすればよいのだろうかという質問なんですが、保護者の柳沢さん、どう思われますか。

### 柳沢

保護者を支援する場所に関しては、やはり私も迷います。うちの子どもはまだ中学1年生だけど、部活の話はいろいろ聞いていますので、実際にどういうふうに関わっていけばいいのか、意見が必要な時もあるんですね。そこで将来も大学に行かせたいという気持ちがある時にどの大学がいいのか、いろいろ疑問でもう一杯なんだけど、誰に相談していけばいいのか、まだこれから勉強していかなければいけないんですけど、その中でものを知ることと、やはり文化と文化の違いで関わっていかなければならないという必要があると思うんですね。その時にちょっと相談する場所があったらいいなと思います。

小学校の時に私が一番必要だと思ったのはおじいちゃん、おばあちゃんですね。息子はおじいちゃんとおばあちゃんはブラジルにいますので、その方たちとの交流が必要というふうに思いました。やはりその関係が大切で、家に帰って、本を読んであげたり、いろいろおじいちゃんおばあちゃんから聞く話がたくさんあると思うんですね。その経験は必要ではないのかなと日々私も思っていました。自分だけが育つのではなくて、うちの息子もその場所に連れていってお話を聞かせてあげたらいいなと思います。やはり文化の違いでいろいろ悩んでいることもあるので、正しいかどうかということではなくて、支えてくれるちょっと情報を得ることができる場所があればいいな、やはり必要だと思います。ぜひ作ってください、私行きたいと思います。

## エウニセ

もう一つコメントがあります。さきほどの子どもに通訳をさせることに関してなんですが、具体的にどのような学校の先生が子どもにその通訳を頼んでいるのか、させているのか、具体的にもう少しその話をしてほしいということです。谷丸さんの経験のもとで、子どもが通訳を頼まれているのは、親としては誇りに思えること、日本語、ポルトガル語ができるというのできと親たちも先生たちもいいと思っているのではないかなとそういう印象なんです、ただ小学生、中学生である子どもたち自身が日本の学校の文化に慣れよう、馴染もうという努力をしているなかで、それを頼まれるとどうい問題があるのかという質問です。経験された谷丸さんがもう少し詳しくお話しできるのではないのかなと思います。

## 谷丸

5年生の時に転校してきたお友だちは他の市の小学校に通っていていじめにあっていたみたいで馴染めなくて、浜松の方に転校してきた子だったんですね。一緒に遊ぼうと友だちの輪の中に入れるのがとても大変で、自分もその輪に入るのが大変な時にもっと大変な子どもを仲間入りさせるのをすごく負担に思っていたんですね。今現在中学2年生の子は全く日本語がわからなくて、この前も授業参観会で後ろで見ていたんですけれども、その男の子は一所懸命説明している先生の説明を聞いていないんですね。で、うちの子はその反対側にいて自分のことをやっているんですけれども、「皆前を向いて先生の話を聞いて」と言っている時に、皆は向くんですけれども、その子はわかっていないので、先生の方を見ないでずっとやりつづけていた。もう少しね、そういう時に具体的に「先生がこういうふうに言っているよ」とか言ってあげればいかなと私は思ったんですけれども、子どもにしてみればそれは非常に難しい。で、その子どもは今でも一緒じゃないので、その日本語のレベルとかもありますので、小学校の時のいじめられた子と今の中学校2年生の子はもう別の状況なので、わからないですね。その場、その状況に応じていくしかないと思います。どの場合も子どもにとっては難しいと思います。

## エウニセ

次の課題とつながるんですけど、母語教育についての質問をいただいています。保護者はどのように母語を重視しているのか、理解しているのかという質問です。母語教育と言った時の「母語」の意味というのは、例えばさきほど通訳を頼まれる子どもたちもポルトガル語、日本語ができると言っても、通訳の能力があるのかということです。自分のほしいものはポルトガル語で伝えられるけれども、日本語の文章をそのままポルトガル語に通訳できる能力があるのかというのも一つありますし、単語の簡単な通訳、例えば「お水」とか「授業がはじまる」とかはできたとしても、ちょっと高度な文章、ちょっと高度な内容になると小学生レベルの子どもには難しい。家ではポルトガル語で話しているからといって、母語はポルトガル語、だから日本語への通訳はできるだろうというその思い込みが、子どもにどんな負担をかけるのかという心配もあります。母語教育に関して皆さんはどう思いますか。または、一般の保護者はどういうふうに理解されていますか。

## 谷丸

浜松に来て、まつっこという教室があると学校に紹介していただいて、すごく感動してありがたいなと思って、子どもたち二人とも通わせていただいたんですね。市の方からこんなにもすごいサポートをしているのは本当に感動です。中学校に入ると部活が忙しくなるので通えなくなったんですけれども、各家庭での母語教育はたぶん親たちでも本を読んであげたりとか、しゃべったりとか、あとは向こうのテレビを見たりとかしています。まつっこはすごくありがたいんですね、続けてほしいです。

## エウニセ

柳沢さんの今日のお話の中に自分の子どもの母語は日本語であるとおっしゃっていたんですけれども、柳沢さん自身も旦那さん自身もブラジルから来ている方なんですけれども、その意味も含めて母語教育をどういうふうに理解すべきなのか、何を重視されているのかを話していただきたいと思います。

## 柳沢

私は最初から子どもを日本で生んで教育を受けさせようという決意をしました。その時から日本語がやはり必要、やはり生まれた時には日本語とポルトガル語でカードを見せたり、よくバイリンガルでやっていた

んですけど、バイリンガルで続けるためにはやはり絵本を読んだり、日本語、ポルトガル語、かながあってもわかってポルトガル語で読ませたり、日本語でも読み続け、でも、幼稚園は日本の幼稚園に通っていたものですから、やはり日本語の方が母語になっていくんですね。それでは、母語は日本語にすると決意したのです。

だけど私はブラジル人だし、夫もブラジル人です。完璧な日本語ではない。少しでもポルトガル語の教育が必要なんじゃないかなというふうに思って、第二言語として取り入れたんですね。最終的には、こうやってポルトガル語だけ、日本語だけというのではなくて、自然と自分の生活の中では日本語、それにプラスしてもっと触れ合うために本の読み聞かせをしたり、ブラジルのテレビをつけてポルトガル語で見せたり、なんか興味を持ったことでちょっとポルトガル語の単語を取り入れたり、自分もポルトガル語を教えているので、その場にちょっと連れていったり、触れさせること、機会をもっと広げせることを必要としたんですね。

第 2 言語としてはやはりポルトガル語、自分も本人もポルトガル語で少しずつ言葉が出てきているんですね。ブラジル人と話しているとなぜかわからないのですが、自然とポルトガル語が出てしまうんですね。やはり相手はブラジルの方だし、ポルトガル語しかわからないからその時はちゃんと自然にポルトガル語が出ました。基礎としては日本語、これから日本で生きていくための日本語、学習についていけるための日本語をしっかりと、第 2 言語としてはポルトガル語を入れたんです。

その中で私も教育で失敗したとたまに感じることはあるんですけど、子どもが多少、年をとって、中学校になるともっと新聞の記事に関して語りたいという思いはあるんですね。でも、私の日本語では辿りつけないということもあるんです。その時にどうやって向かっていけばいいのかとたまに疑問に思うことがあります。ブラジルではうちの母と父は新聞を読んで、それに関して語っていたのです、食事の間やちょっとした休み時間に。息子が高校生になって、どうやって私は新聞について語っていけばいいんだろうかとたまには疑問に思うこともあるんですけど、それが欠けているのは私はしょうがないと思っています。

だけどしっかりと第 1 言語として日本語、プラス第 2 言語としてポルトガル語をとり入れて、自分で後で将来に困らないように、きっと将来、ポルトガル語を使う時や外国人の方と接する機会があればきっと本人も「おおっ」といって引くのではなくて、もっと親しいような感じで接してほしいですね。それを自分の中で教育に関して大切にしていきたいなと思います。確実なバイリンガルではないんですよ、プロフェッショナルの方がいうように、でも第 2 言語としては取り入れ続けていきたいなと思います。

## エウニセ

本人が体験された宮城ユキミさんは自分の母語に関しても一般的にどういうふうにそれを見ればいいのかということに関してお願いします。

### 宮城

私もさきほど言いましたようにブラジルで生まれて 10 歳まで全部ポルトガル語で教育を受けてきました。10 歳だと小学校 4 年生くらいまでの教育をポルトガル語で受けてきたことになります。それを日本に来た時にある程度日本の言葉に切りかえていったというふうに自分は思っていて、その意味である程度の普通の教育、日本語、ポルトガル語に関係なく、それに日本語を積み重ねていったというふうに自分は考えています。なので、さきほど柳沢さんがおっしゃったようにある程度ベースの言語があって、その上に第 2 言語があるというのがとても重要だと思います。今どっちでもない子どもたちが増えていて、その上でさらに学習となるととても難しいと思うので、どっちか一つちゃんとベースとしての言語があるのは大事ななというふうに思っています。

## エウニセ

上田ナンシーさんも自分の経験がありますし、日本で長い間いるんですけども、今までされてきたお仕事の中でも母語教育、言語問題に関わってきたと思いますので、ご意見がありましたら、お願いしたいと思います。

### ナンシー

私は本学の准研究員になる前には、県の多文化共生課というところで 5 年間勤めました。そこで、教育



関連の会議や小学校などに出向いて出前教室をやることもあったので、その時に聞いたことなどで印象に残っていることがあります。その前に私自身の体験をちょっと紹介します。

私は日系2世で両親が三重県から1960年代にブラジルに移民した日本人移民です。私は今の子どもたちとは逆の経験をしました。母は未だに私と話す時は日本語で話して、私はいつもポルトガル語で返しています。家の中では日本語を話して、私も多分、幼稚園に通うまでは母がいつも日本語で話していたので、母語が日本語だったと思います。幼稚園からブラジルの学校に通いはじめて、そこからポルトガル語の単語とかをいろいろ身に付けていきました。両親はポルトガル語が得意ではないので、学習面では何もサポートしてくれなかったのですが、私には10歳年上の兄がいて、大学進学の際にわからないことがあれば兄のサポートがありました。そういう面では運がよかったのかもしれないと思います。兄は10歳年上で社会に出たときから新聞を購読していたので、私も高校生の時からポルトガル語の新聞を毎日頑張って読んでいたので、学校で一番得意な科目はポルトガル語でした。親とはまったくポルトガル語を話せなくてもなぜかポルトガル語が得意になりました。

でも私は7歳の時から高校生まで日本語教室に通っていました。家の近所にあるもので、主に日本人移民の子どもたち向けのものでした。教科書は日本の小学校の「国語」を使っていました。大学でも第2言語として日本語の科目を勉強しつづけたからこそ、今ここでこうやって日本語で話ができるのだと思います。

それで、また最初の話に戻りますが、2009年に県のある教育関連会議に出席した際に、公立学校の先生が出した意見で、外国人の子どもたちはまだ日本語がそんなにうまくできていないので、家庭内でも保護者には日本語で話してほしい、というのを聞いたことがあります。それを聞いた時に、ちょっと違うんじゃないのかなというふうに思いました。文化として、親の言語はとても大切だと思いますし、子どもにとっても将来、すごくプラスになるものだと思います。

## エウニセ

ついでに私の紹介もちょっとします。私も日系2世なんですけども、ナンシーさんと違うところは、ナンシーさんはご両親が大人になってからブラジルに移住されています。書類上では2世となっていて、私の父は2歳の時にブラジルに渡っています。ですから基本的に私は20歳まではポルトガル語で育てられました。今考えると無邪気だったなと思うのは、親はブラジルで育てられた移民家庭で日本語を話していました、母もブラジル生まれの日系2世です。ですから両親が話していた日本語というのは日本語とポルトガル語が混ざっているもので、私は子どもの時、別に勉強しなくても、大人になれば日本語ができるようになるんだとずっと思っていました。子どもはポルトガル語を話して、大人になるときっと日本語で話せるようになるんだなと思っていましたが、今、大人になって日本語は話せるようになりましたが、これは私みが20歳の時に日本に留学して来てそれから本格的に日本語を勉強したからです。私の場合も日本語は第2言語になります。

たださきほどのナンシーさんと同じように、小さい時に日本語学校というところに無理やり通わされていました。そこには日系人の子どもが多くて、10年間は通いました。4歳から14歳。で、何を覚えたかという、ひらがなとかカタカナかな？というくらいで、ただ日本という雰囲気はこういうものなのかなと少し想像はできました。留学してから日本語に対する親近感とは他の外国人と比べるとあったかもしれないんですけど、かといって親が日本国籍で日本生まれだから、私も母語は日本語だと言われるとちょっと違うなということになります。

ちなみに今後ろにちょっとうるさい子どもたちがいるんですけども、今4歳と1歳の子どもがいて、私は家では基本的には日本語は一切使いません。4歳になっているので、今後日本の小学校に行った時に、さきほどもありましたように、学習言語をどうするか、第1言語をどうするのか、という時に日本にいれば日本語になるのが自然。ただ親としては母語という名の上で使っているポルトガル語の音を脳のどこかにしまっておいてほしい。うちの家族はちょっと複雑で父さんがアメリカ出身でポルトガル語はできるんですけど、基本的には子どもに英語でしか話していないです。今4歳の時点ではトリリンガルというふうに言えますけれども、だんだんと日本での生活が長くなるとやはり日本語がメインになっていきますし、日本語の遠州弁ができるようになって、ママもわからないような言葉が出てきて、私も今度は日本語以外に遠州弁も覚えなければならぬのかなと思っています。

さて、調査に関するデータの質問がありましたので、ナンシーさんに簡単に答えていただければと思い

ます。

## ナンシー

外国籍の保護者が宿題を見ることと子どもの学年との関係をもう少し詳しく教えてほしいというコメントをいただきました。回答で一番多かったのは「可能な範囲で見てあげる」というのがあったのですが、それが一番多かったのは小学校 1 年生が 2 世帯、小学校 2 年生が 2 世帯、小学校 4 年生が 2 世帯、高学年では小学校 5 年生の 2 世帯もありました。次に多かったのが、「全部みてあげる」というもので、小学校 1 年生と 2 年生の家庭でした。「見てあげるが、算数や理科は教えられない」と答えたのが高学年の小学校 3 年生と 4 年生と 6 年生の家庭でした。あとは「あまり見てあげない」が小学校 1 年生と 3 年生と 6 年生の家庭もありました。「まったく見てあげない」のも小学校 2 年生が 1 世帯、3 年生が 2 世帯、4 年生が 2 世帯、就学前でまだ宿題がないと答えたのが 2 世帯でした。

もう一つの質問は保護者 33 名の世代、日系何世なのかについてでした。これは調査では聞いていない項目でしたので、学生たちもインタビューの時はこれに関して触れていません。しかし、報告書にはお父さんが日系で母さんが非日系だったというメモはありましたが、全てのご家庭のその情報はなかったので、具体的にはこの質問には答えられません。

あとは回収率が 15% にも満たない低回収率だったため、保護者の最終学歴について偏りはないのかという質問がありました。保護者の半分くらいが高校卒業でした。その中の 5 名は大学進学を果たしたが休学したという方でした。大学を卒業した方が 2 名。それを考えてみるとちょっとは偏っているかもしれないんですが、保護者の中には中学校を卒業した方と中学校を中退した方もいます。ここで今データは持っていないのですが、2012 年のブラジル全国民の最終学歴のデータを先日講義の中で発表したのですが、その時も大学進学を果たした人は 1 割にも満たないので、その意味では偏っているといえるかもしれません。ブラジルでも高校卒業が一番多いです。

## エウニセ

後は具体的な質問で外国人の高校進学率が浜松市ではどのくらいですかという質問なんですが、池上先生に答えていただきたいと思います。

## 池上

浜松市の教育委員会が作成した視察資料を市教委の市川先生からいただいています。お問い合わせの高校進学率ですが、平成 25 年度末のもので 84.2% となっています。推移でみると、ここ数年間で若干上昇傾向があるかなと言えます。ただ内訳を見てみますと、これも皆さんご覧のとおり、定時制が多い。定時制の方に今度視点を当ててみると、中学校までと違ってほとんど支援がないですから、やはり中退してしまう子どもも多々います。私自身も外国籍の子が多く通っている定時制の教頭先生からそういう話を直接聞いています。ということで高校進学はこのくらいです。もちろん、日本人はほぼ全員高校に進学しているので、外国人の高校進学率は明らかに低いです。今日は実は市の教育委員会の市川先生にお越しいただいているので、ちょっとコメントをいただきましょう。今の 84.2% という数字はもちろん市教委が出した数字ですが、市川先生も子どもの支援、教育に長く関わっているなかで、この数字についてどのようにお考えですか。

## 市川

そうですね、私は今年度から教育委員会の方に勤務していますが、昨年度までは小学校の教員をしておりました。そうですね、84.2% はもう少し上げていかなければいけないということと、それから高校の種別を見ましても、池上先生がおっしゃったとおり二極化していることが事実だなと思います。

数字の推移を見てみるとだんだん上がってきていますし、このくらいかなと思いますし、自分たちがもう少し学習支援の方にも力を入れていかなければならない現実があるんだなと思います。

## 池上

ありがとうございました。公立の全日制が 40%、定時制が 27%、あと通信制などがありますが、大ざっぱに言うと全日制に 40%、定時制が 27% ということになっています。

## エウニセ

せっかく皆さんに来ていただいたので、フロアからも質問やコメントなどがありましたらお願いしたいと思います。

## 質問者

静岡県の焼津市からまいりました。焼津市は人口 15 万 5 千人で外国人の方が約 3 千人いまして、今フィリピンの方たちが千人くらい、ブラジルの方よりもフィリピンの方の方が最近増えてきました。焼津市の市議会議員を務めておりまして、そういう支援とか多文化共生をテーマに今調査しているものですから今日は来させていただきました。

焼津市は本当にまだまだ遅れていまして、いろんな支援の在り方があるとは思いますが、さきほど母語の話がありましたよね。図書館や公共施設に文化的な絵本などがもっと置いてあればいいのではないかなと思うのですがいかがでしょうか。私もぐるっと回って見たんですけど、焼津市には千人もフィリピンの方がいるのにタガログ語の絵本とか資料的なものは一切置かれていないし、なにか非常に放置されているという感じがします。さきほど、母語をどちらにするかという課題がありましたけれども、なかには引き裂かれてしまうと言いますか、ブラジル人なのか、日本人なのか、どうやって生きていったらいいのか、そのアイデンティティはそれを育てる機会がないまま小学校、中学校を卒業していくという子もいます。それはとても大きな問題だと感じたので、例えば図書館などにそういう文化的なものなどや子育てをする機会が揃っているのはいいのではないかなと思いました。

## 宮城

図書館に関してなんですけど、私は浜松市の南区の辺りに住んでいて、学校には絵本が置いてありました。ブラジル人はそんなに多くなかったんですけど、何冊かは置いてありました。その地区の公民館にも日本語を覚える冊子や『みんなの日本語』のような日本語学習教材も置いてあったり、絵本は数冊くらいですが小さいコーナーにポツンとありました。

## 柳沢

絵本に関してなんですけども、絵本を置くのはとても大事だと思うんですけど、ただ置くだけではなく、絵本を実際に手にとる機会を設けることも大事だと思います。

【以後の質疑応答については記録機器のトラブルのため記録なし】

## 第8回 多文化子ども教育フォーラム


# ブラジル人保護者は何を考えているか —趣旨説明—

2014年6月14日(土) 於静岡文化芸術大学

静岡文化芸術大学 文化政策学部

国際文化学科 教授 池上 重弘

<http://wwwt.suac.ac.jp/~ikegami/>

HP 池上重弘研究室 

## 静岡文化芸術大学で学ぶ 移住第2世代の若者たち

入学 年度	文化政策 学部	デザイン 学部
2006	1	
2007		
2008		2
2009		
2010		
2011	2	
2012	4	
2013	4	

- ◇ 高校・大学進学も確実に増加
- ◇ 地域活動の担い手としても台頭



はままつグローバルフェア(2013年2月10日)



# ブラジル人児童向け学校生活導入絵本 (作:金城ジゼレ、生産造形学科2012年度卒業制作)

## 「浜松における日本の学校」表紙



## 目次

O dia-a-dia na escola Japonesa  
(にほんのがっこうのまいにち)

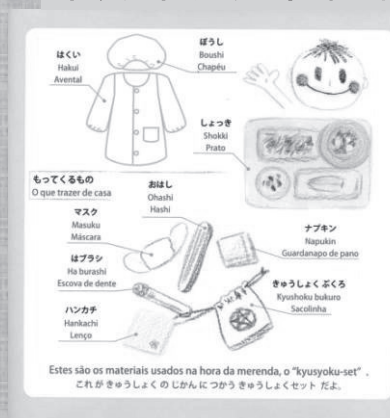
- \* \* \* \* \* Materiais e o dia-a-dia na escola  
がっこうでつかうもの と がっこう の いちにち
- \* \* \* \* \* Os principais materiais usados na escola  
がっこうでつかうきょうぎいりもの
- \* \* \* \* \* Como ir à escola  
どうして
- \* \* \* \* \* Chegando na escola  
がっこうにいついて
- \* \* \* \* \* A hora da merenda  
きょうしやく
- \* \* \* \* \* A hora do recreio e a limpeza  
あそびとそうじ
- \* \* \* \* \* Após a aula  
はうし
- \* \* \* \* \* Quando for faltar  
あやまるとき
- \* \* \* \* \* Eventos na escola  
がっこうぎょうじ
- \* \* \* \* \* Reuniões e visitas  
かいぎん や ほうもん
- \* \* \* \* \* Final  
さいごに

- ブラジル人児童向け
- 入学ガイダンス絵本
- 日本語／ポルトガル語のバイリンガル絵本
- 自分の経験をもとに取材

## 給食の準備



## 給食に関連する言葉の説明



日本の小学校が  
 楽しみになるように！

2013年度文化・芸術研究センター長特別研究  
「多文化環境に生きる子どもの教育達成支援策をめぐる研究」  
(研究代表:池上重弘、他4名、計5名の教員)

	絵本	家庭訪問調査 (ブラジル人学生)
6月	印刷準備	
7月	印刷	
8月		
9月	配布活用	
10月		
11月		(11月中旬～ 12月中旬)
12月		



ブラジル人卒業生が作った  
バイリンガルUD絵本を、  
ブラジル人の在校生たちが、  
ブラジル人の小学生に  
想いのバトンとして届ける！

UD絵本を持った  
ロールモデルの  
デリバリー

## 家庭訪問調査

静岡文化芸術大・ブラジル人学生

### 学ぶ意欲支援へ 家庭訪問で説明

浜松市立の静岡文化芸術大に在籍するブラジル人学生らに、入学後の生活環境や授業内容について説明し、学ぶ意欲を高めることを目的とした家庭訪問が16日、行われた。同日は、同大のブラジル人学生らに、入学後の生活環境や授業内容について説明し、学ぶ意欲を高めることを目的とした家庭訪問が16日、行われた。

家庭訪問では、ブラジル人学生らに、入学後の生活環境や授業内容について説明し、学ぶ意欲を高めることを目的とした家庭訪問が16日、行われた。

実体験伝え「絵本」活用

ブラジル人学生らに、入学後の生活環境や授業内容について説明し、学ぶ意欲を高めることを目的とした家庭訪問が16日、行われた。

記者会見時 2013年11月16日(静岡新聞)

2014年(平成26年)1月12日(日曜日) 22

### ブラジル人児童の教育環境で課題 進学情報が不十分

外国人の教育環境を話し合う多文化子ども教育フォーラムが11日、浜松市中央区の市地域情報センターで開催された。ブラジル人児童の家庭訪問をした静岡文化芸術大(旧静大)のブラジルの学生たちが「進学情報が十分に引き継がれていない」などと課題を指摘した。

中区でフォーラム  
同郷の文化芸大生が指摘

ポルトガル語での討論会  
2014年1月12日(中日新聞)  
討論会の全貌をまとめた報告書は  
本学学術リポジトリからダウンロード可能  
(多文化子ども教育フォーラムHPからたどりつけます)

6/14（土）第8回多文化子ども教育フォーラム  
「バイリンガル絵本プロジェクト」から見てきたもの  
～ブラジル人大学生によるブラジル人児童家庭訪問調査報告～  
静岡文化芸術大学准研究員 上田ナンシー直美

## はじめに

本学ではすでに3名のブラジル人学生が卒業している。2011年3月には初の日系ブラジル人学生の林ケンジさんが卒業式で卒業生の代表役を務めた。また、その2年後に卒業した金城ジゼレさんは、「Escola do Japão em Hamamatsu」（『浜松における日本の学校』）という日本語とポルトガル語のガイドンス絵本を制作した。これは、デザイン学部の卒業制作として、自ら経験した日本の学校生活をブラジル人の子どもたちに楽しく紹介するものである。このバイリンガル絵本が今回のブラジル人児童家庭訪問調査プロジェクトのきっかけとなり、現役ブラジル人大学生と次世代の子どもたちをつなぐ機会を与えてくれた。また、このプロジェクトの初回の家庭訪問調査では卒業後に林ケンジさんがハウジングメーカーの就職先で一戸建て住宅を販売したブラジル人のご家庭を偶然訪問することができて、人と人の絆の素晴らしさを改めて実感することができた。

## 調査の目的

これから報告する「絵本プロジェクトブラジル人児童家庭訪問調査」は2013年度静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター長特別研究「多文化環境に生きる子どもの教育達成支援策をめぐる研究」（研究代表：池上重弘）の一環として実施されたものである。

家庭訪問調査の目的は二つあった。一つ目の目的は日本でブラジル人がもっとも多く集住している浜松市に立地する公立大学という立場で、本学に在籍する『人的リソース』であるブラジル人学生たちが有する多言語・多文化的背景という潜在力を生かしながら、次世代のブラジル人の子どもたちの現状を把握することであった。二つ目の目的は実際に様々な壁を乗り越え、日本の大学への進学を果たした現役ブラジル人大学生たちが身近なロールモデルとしてブラジル人家庭を訪問し、保護者と子どもたちと意見交換をしたり、自らの経験を紹介したりすることで、子どもたちの将来像を膨らませる機会を与えることであった。

## 調査方法

事前準備として本学の特別研究費でバイリンガル絵本を1,000部印刷した。浜松市教育委員会の協力により、市内でブラジル人児童がもっとも多く在籍している小学校19校の名前を教えてもらった。このリストをもとに2013年の9月から10月にかけて各学校に出向き、実家庭数分の絵本を届けた。学校を訪問した際には校長先生や外国人児童の支援を担当している教諭からバイリンガル絵本の感想や小学校におけるブラジル人児童の現状についてのヒアリングを行った。例えば、絵本の内容について、ある学校からは、外国人児童や保護者にとって学校生活や学校で必要な道具などが絵で分かりやすく説明されているため、市内の全ての小学校にこの絵本が1冊置いてあれば役立つのではないかという意見が出たため、教育委員会の協力を得て、浜松市内の全小学校にこのガイドンス絵本が1冊ずつ配布された。

絵本プロジェクトの進め方についても学校から貴重な意見をもらった。家庭訪問調査の協力者の連絡先を得る際に小学校の先生方になるべく負担をかけない方法として、絵本と一緒にブラジル人保護者宛てに日本語とポルトガル語で書かれた家庭訪問調査の協力依頼書を配付した。この方法で363世帯の家庭にバイリンガル絵本と協力依頼書を届けた。家庭訪問調査に協力してくれるという意向を示した保護者は、協力依頼書の返信用紙に自ら連絡先を記入し、子ども経由で学校に提出した。その用紙は小学校がとりまとめて本学まで郵送した。

10月末の締め切りまでに15校の小学校から38世帯のブラジル人協力者の連絡先が集まった。また、10月上旬には教育委員会が翌年度に小学校に上がる子どもたちのために実施した入学ガイドンスにも足を運び、出席した保護者16名に絵本と家庭訪問調査協力依頼書を配布し、その場で5名の方から協力を得た。その結果、合計43世帯の協力者を確保した。絵本を配布した家庭の約11%に相当する。

11月上旬にブラジル人協力者への家庭訪問のアポ取り作業を始めたが、保護者と電話で直接話した際に「仕事が忙しい」という理由で調査協力を辞退したいという方や、なかなか電話がつかないというご家庭があった。また、1ヶ月間の限られた期間の中で家庭訪問を行う学生と訪問先の



スケジュールをマッチングするのが難しかったり、訪問日の直前に「都合が悪くなった」という連絡を入れて訪問をキャンセルしたりした保護者もでた。

11月16日から12月15日にかけて、ブラジル人学生たちは二人一組で協力者全体の約半数の22世帯のブラジル人家庭を訪問した。家庭訪問調査の対象となったブラジル人児童の学年を見ると、小学校6年生が5名、小学校5年生が2名、小学校4年生が3名、小学校3年生が4名、小学校2年生が2名、小学校1年生が4名、入学前の児童が2名であった。各学年にまんべんなくまたがっていることがわかる。

## ヒアリング項目

家庭訪問の際に学生たちがポルトガル語で聞き取った調査項目は下記のとおりである。

- ① 家族形態
- ② 出身地とブラジルでの生活
- ③ 来日歴と日本での生活
- ④ 仕事の状況
- ⑤ 子どもとの関わり方
- ⑥ バイリンガル絵本の感想
- ⑦ 子どもの教育についての考え

## データ集計の留意点

訪問先によってはブラジル人保護者のどちらかが学生の質問に回答したり保護者二人ともが回答したりしたため、データ分析にはN=33（回答してくれた保護者全員）とN=22（世帯としての回答）の両方がある。

## データ集計

まずはインタビューに答えてくれた**保護者33名**の基本データを紹介する。

回答者の性別は女性が64%で、男性が36%であった。

出身地についてはブラジルのサンパウロ州が61%と最も多く、ついでパラナ州の12%とリオ・デ・ジャネイロ州の9%であった。この地域以外にもアマゾナス州（3%）、バイーア州（3%）、パラ州（3%）、ミナス・ジェライス州（3%）、ボリビア国（3%）とペルー国（3%）が出身の方もいた。

回答者のブラジルでの最終学歴については高校を卒業した人が52%で最も多く、ついで中学を卒業した人が24%、大学を卒業した人が6%、専門学校を卒業した人が3%、中学を中退した人が12%であった。

ブラジルでやっていた仕事について、最も多かったのが事務系で39%、ついで営業職、車関係、手芸がそれぞれ6%、そして工場、デザイン系、看護師、保育園、家政婦がそれぞれ3%であった。また、職歴なしと答えた21%の回答者のほとんどは幼い時期に親と来日した比較的若い保護者であった。

日本語学習について、ブラジルで日本語を学ぶ機会があったと答えた方は30%で、なかったと答えた方は70%であった。

来日前の日本語力については「まったくゼロ」が70%と非常に多く、ついで「簡単なあいさつのみ」、「家庭内の日常会話のみ」がそれぞれ9%、そして「日常会話とひらがなの読み書き」、「日常会話とひらがな・カタカナの読み書き」がそれぞれ6%であった。

ブラジルでの生活についての最後の質問は日系人コミュニティとの関係であった。この質問に対して、「まったくつきあいがなかった」が52%で最も多く、ついで「たまにつきあっていた」が27%、「あまりつきあいがなかった」が12%、「よくつきあっていた」が9%であった。日系人ではあっても、ブラジルにいた時は、必ずしも日系人コミュニティと親密な関係を持っていたとは限らないことがわかる。

続いて、日本での生活についての質問である。

回答者の初来日年については、1990年代後半の46%が最も多く、ついで1990年代前半が36%、2000年代前半が18%であった。

日本での滞在通算については「16年～19年間」が40%で最も多く、ついで「12年間～15年間」が33%、「20年以上」が21%、「11年未満」はわずか3%であった。今回の回答者は、滞

在期間が長期にわたる人々が大半を占めていたことがわかる。

来日後の日本語学習については、日本語を学習したことがあると答えた人が73%で、学習したことがないと答えた人は27%であった。

来日後の仕事については、97%の回答者が工場労働をしたことがあると答えた。現在やっている仕事については工場労働が73%、ついで内職が6%、そしてブラジル領事館勤務、浜松市勤務、学校勤務、送迎業務、現場作業、清掃業務がそれぞれ3%であった。やはりほとんどの保護者が工場労働に従事している。

現在の仕事の時間帯について、もっとも多かったのが昼間で64%、ついで2交代が15%、夜勤、パート、「決まっていない」がそれぞれ6%であった。

続いて、**22世帯**の家庭についてのデータを紹介する。

訪問した家庭の家族構成についてもっとも多かったのが「父母、子ども2人」の37%であった。ついで、「父母、子ども3人」が23%、「父母、子ども1人」が14%、「母、子ども1人」が9%、「父母、子ども4人」、「母、子ども2人」、「父、子ども1人」、「保護者、子ども1人」がそれぞれ4%であった。

日本社会との接点として、生活に関する情報をもらったり、困った時に相談に乗ってもらったりするような、仕事関係以外の日本人の知り合いがいるかどうかについて、「いる」と答えた世帯が55%で、「いない」と答えた世帯は45%であった。

日本社会の情報源については、自治会の回覧版が64%でもっとも多く、ついでブラジル人の知人が59%、市の広報が46%、フェイスブックが38%、日本のテレビが32%、子どもの学校、日本人の知人、インターネットがそれぞれ27%、HICEの広報が23%、ポルトガル語の情報誌が18%であった。

保護者から見た子どもの日本語力については、「読み書きも含めて問題ない」が74%と非常に多く、ついで「日常会話は問題がないが、学力に問題がある」が18%、「話すのは問題ないが、読み書きに問題がある」と「少しだけ理解できる」がそれぞれ4%であった。保護者からは子どもの日本語能力がおおむね高く評価されているが、学力面では不安を抱えている人があることもわかる。

その一方で子どものポルトガル語力について、「読み書きも含めて問題ない」が14%でもっとも少なく、「日常会話はできるが、日本語の方が得意」、「話すのは問題ないが、読み書きに問題がある」、「少しだけ理解できる」がそれぞれ約30%であった。母語であるポルトガル語能力に課題があるようである。

保護者が子どもと話す言語はポルトガル語が73%ともっとも多く、ついで日本語のみが19%、両言語を同じように使うとスペイン語がそれぞれ4%であった。

保護者が子どもと接する時間については、平日の夜と週末が59%でもっとも多く、ついで、平日の朝と夜と週末が23%、主に週末が14%、平日の朝と週末が4%であった。

運動会や参観会、三者面談などの学校行事への参加について、「全て欠かさずに行く」が55%でもっとも多く、ついで「ほとんど行く」が37%、「ときどき行く」、「配偶者と交替で行く」がそれぞれ4%であった。今回の回答者の家庭では、子どもとの接触や学校行事への参加については比較的積極的な傾向が認められる。

子どもの宿題を見てあげているかについては、32%が「可能な範囲で見てあげる」ともっとも多く、ついで「全部見てあげる」、「見てあげるが、算数や理科は教えられない」がそれぞれ18%、「あまり見てあげない」が14%、「まったく見てあげない」、「就学前でまだ宿題がない」が9%であった。

子どもに本や絵本を読んであげているかという質問に対して、68%の家庭が読んでいると答え、32%が読んでいないと答えた。学習面のサポートや情操教育では十分に対応できていない様子も伝わってくる。

バイリンガル絵本の感想について、良いと思った点は「内容が良い」が73%で非常に多く、ついで「入学時に役立つ」が46%、「デザインが可愛い」が23%、「バイリンガルである」が14%、「編入する子に役立つ」が9%であった。

その一方で絵本の改善すべき点については「親への情報」が38%でもっとも多く、ついで「教科書の説明」が18%、「学年ごとの説明」が9%、「国際教室の説明」、「特別学級の説明」、「語彙リスト」、「文化の違いの説明」、「勉強への啓発」がそれぞれ4%であった。

子どもの進学への期待について、ほぼ半数（46%）の家庭が「国を問わず、大学に進学してほ

しい」と答えた。ついで、「日本の大学に進学してほしい」が28%、「子どもがやりたいことをやってほしい」が14%、「ブラジルで教育を受けてほしい」、「日本で行けるところまで行ってほしい」、「ブラジルの大学に進学してほしい」がそれぞれ4%であった。家庭訪問を受け入れると意思表示してくれた家庭だけに、子どもが大学まで進学することを望んでいる家庭がほぼ8割に達している。日本の大学への進学希望も3割近くあり、これからは大学進学に向けた支援も課題として大きくなりそうである。

子どもの進学への課題について、「経済面」が55%でもっとも多く、ついで「子どもの学習力」が23%、「情報がない」、「親が日本語がわからない」、「日本の教育制度がわからない」が18%、「帰国時が未定である」が14%であった。

最後に、日本の学校について良くわからないことは「PTA 活動」と「学校生活・ルール」がそれぞれ27%、「いじめの問題」が18%、「親として準備すべきこと」、「部活動」、「日本語のアンケート」がそれぞれ4%であった。

### ヒアリング後に保護者が学生にした質問

家庭訪問では、保護者へのヒアリングが終わった後に保護者と学生たちが意見交換をしたり、保護者が気軽に目の前にいるブラジル人大学生に彼らの体験や困難だったことについて質問したり、子どもへのアドバイスをお願いしたりする時間も設けられた。保護者が学生にした質問の例は下記のとおりである。

- ・いつ日本に来たのか。
- ・いつから日本の学校に通っているのか。
- ・高校に入学するには試験があるのか。
- ・高校生活はどうだったのか。
- ・浜松市の高校はどう選ぶべきなのか。
- ・勉強方法はどうだったのか。
- ・言語の運用能力はどうか。
- ・大学の入試方法はどうか。
- ・大学進学で困難だったことは何だったのか。
- ・大学で何を学んでいるのか。
- ・大学でかかる費用はどのくらいなのか。
- ・奨学金制度はあるのか。
- ・将来の夢は何か。
- ・どの国で仕事をしていきたいのか。
- ・日本の学校でいじめを受けたことがあるのか。
- ・子どもが外国籍の児童からいじめを受けることは一般的なのか。

### 家庭訪問を実施した学生たちの感想

家庭訪問を実施した学生たちは担当した家庭のヒアリングの結果と家庭に対する感想を報告書にまとめた。今回の家庭訪問に協力してくれたブラジル人家庭が比較的教育熱心だということは学生たちが書いた感想からも伝わってくる。

・「非常に教育の意識が高いと感じた。子どもを手伝う体制が整っていて、素晴らしいと思った。」

・「母は教育熱心で、日本の教育には好印象を持っている。子どももその影響を受けてか、進学に対して前向きな気持ちを持っている。」

・「父はとても教育熱心で子どもたちの将来のことをよく考えていそうだった。」

しかし、日本での将来が不安だと思っている保護者やブラジルへの帰国を検討している保護者もいた。

・「外国人は将来的に良い機会があまりもらえないという噂を聞いたことがあるため、子どもの将来に不安を持っている。そのため、いつかはブラジルに帰ることも選択肢の一つとしている。」

・「ブラジルへ帰りたい家族のせいか、そこまで訪問に興味を示さなかった。また、教育に関してもあまり熱心にしていないようだった。」

また、いじめの問題についての相談が目的で調査に協力した家庭があった。

- ・「母は学校でのいじめについて相談したくて、家庭訪問へ協力したという。」
- ・「長男のいじめ問題について真剣に悩んでいる様子。」

#### まとめ：家庭訪問調査から見てきたもの

このバイリンガル絵本プロジェクトを通して、ブラジル人保護者が子どもたちの進学について思っていることや課題がいくつか見えてきた。例えば、ヒアリングに応じてくれた保護者 33 名のうち、大学進学を果たした保護者は約 2 割で、大学を卒業したのはわずか 6%であった。それでもほとんどの保護者（約 8 割）は子どもが大学に進学してほしいという思いを抱いている。その中には、「工場で働く自分の姿を見せ、娘がそうならないように勉強するよう励ましている」という保護者もいる。

日本での大学進学を希望しているブラジル人保護者からはいくつかの課題が挙げられた。例えば、子どもの宿題（特に算数、理科、国語）をあまり見てあげられないため子どもの学力が心配であることや、大学でかかる費用（経済面）が心配であることや、保護者自身が日本語がわからないため子どもの進学について必要な情報を得られないことなどが挙げられた。そこで、ブラジル人大学生との意見交換では積極的に学生たちの学習方法や学校生活や大学の学費などについて質問する保護者がたくさんいた。例えば、学費に関しては、学生たちからはじめて就学援助や奨学金制度が存在することを知ったという保護者がいた。

しかし、進学に関する情報が足りないという点については、既にポルトガル語に翻訳されている進学情報がそれを必要としている人たちのところまで届いていないかもしれないという課題も見えてきた。

## 第8回多文化子ども教育フォーラム

# 「バイリンガル絵本プロジェクト」 から見えてきたもの

～ブラジル人大学生による  
ブラジル人児童家庭訪問調査報告～

静岡文化芸術大学准研究員

上田ナンシー直美

2014.6.14(土)

1

## 絵本プロジェクト調査方法

9月

・ 浜松市教育委員会【19校】

9月～  
10月

・ 小学校【363世帯に配付】  
・ 入学ガイダンス【16名に配付】

11月

・ 保護者連絡先【 $38 + 5 = 43$ 名】

11月  
～12月

・ 家庭訪問調査実施【22世帯】

2



### ブラジル人 児童の学年

小6→5名  
小5→2名  
小4→3名  
小3→4名  
小2→2名  
小1→4名  
就学前→2名

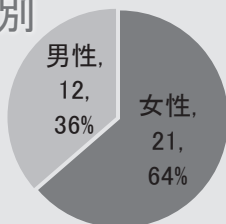
### ヒアリング項目

- ①家族形態
- ②出身地とブラジルでの生活
- ③来日歴と日本での生活
- ④仕事の状況
- ⑤子どもとの関わり方
- ⑥バイリンガル絵本の感想
- ⑦子どもの教育についての考え

3

## 保護者33名の基本データ(N=33)

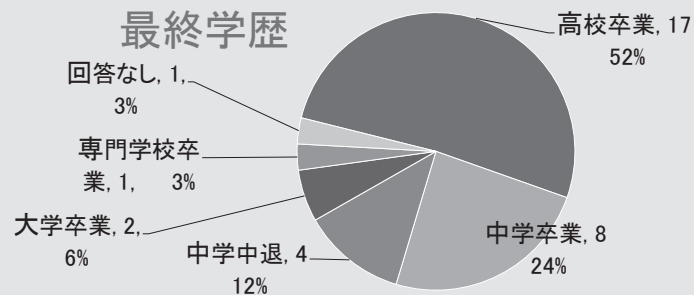
### 性別



### 出身地

サンパウロ州：20名(61%)  
パラナ州：4名(12%)  
リオ・デ・ジャネイロ州：3名(9%)  
その他：6名(18%)

### 最終学歴



4

## 保護者33名の基本データ(N=33)

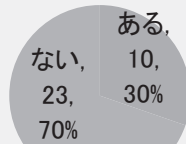
### ブラジルでの仕事

事務系: 12名(39%)  
職歴なし: 7名(21%)  
営業職: 2名(6%)  
車関係: 2名(6%)  
手芸: 2名(6%)  
その他: 7名(22%)

### 来日前の日本語力

まったくゼロ: 23名(70%)  
家庭内の日常会話: 3名(9%)  
簡単なあいさつ: 3名(9%)  
ひらがなの読み書き: 2名(6%)  
ひらがなとカタカナ: 2名(6%)

### 来日前の日本語学習経験

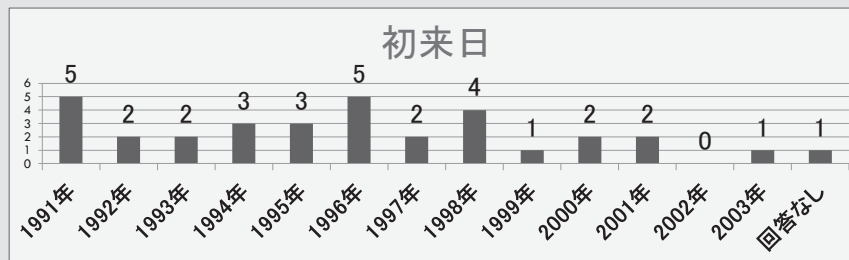


### 日系人コミュニティとの関係

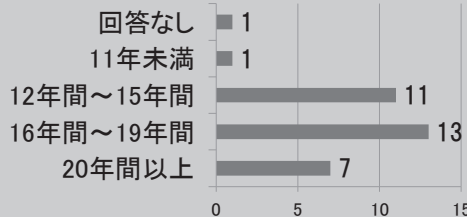
まったくつきあいがなかった: 17名(52%)  
たまにつきあっていた: 9名(27%)  
あまりつきあいがなかった: 4名(12%)  
よくつきあっていた: 3名(6%)

5

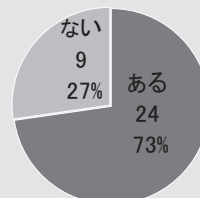
## 保護者33名の基本データ(N=33)



### 日本での滞在通算



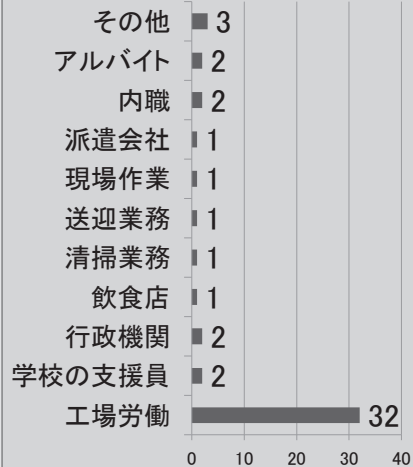
### 来日後の日本語学習経験



6

## 保護者33名の基本データ(N=33)

### 日本でしてきた仕事



### 現在の仕事



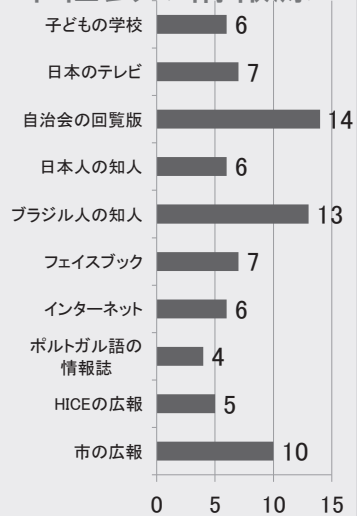
7

## 22世帯のデータ(N=22)

### 家族構成



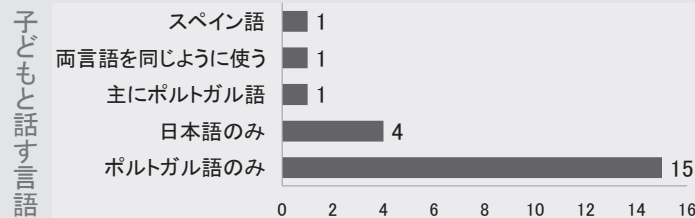
### 日本社会の情報源



8

## 子どもの言語について(N=22)

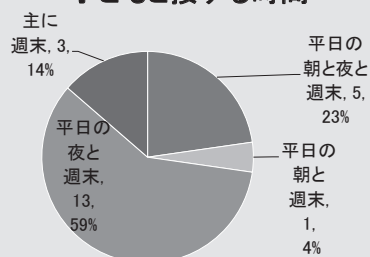
子どもの日本語力		子どものポルトガル語力	
読み書きも含めて問題ない	16名 74%	読み書きも含めて問題ない	3名 14%
日常会話は問題ないが、学力に問題がある	4名 18%	日常会話はできるが、日本語の方が得意	7名 32%
話すのは問題ないが、読み書きに問題がある	1名 4%	話すのは問題ないが、読み書きに問題がある	6名 27%
少しだけ理解できる	1名 4%	少しだけ理解できる	6名 27%



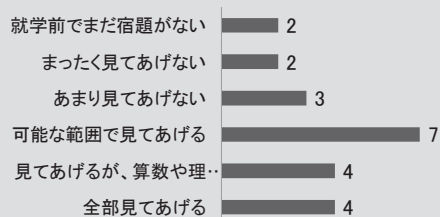
9

## 子どもとの関わり方(N=22)

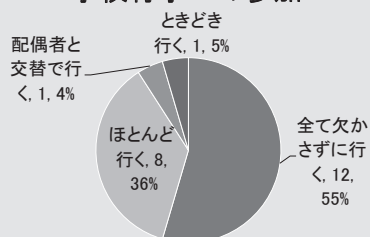
### 子どもと接する時間



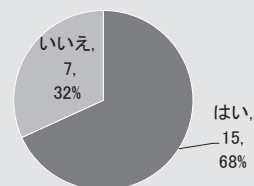
### 子どもの宿題 度数



### 学校行事への参加



### 絵本の読み聞かせ



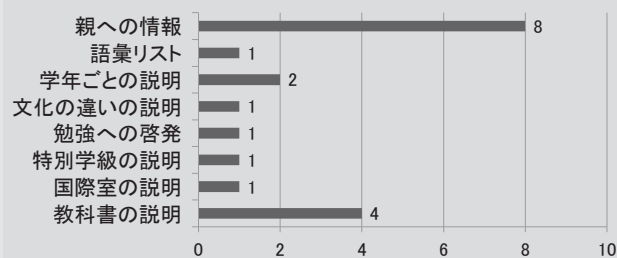
10

## バイリンガル絵本の感想(N=22)

### 絵本の良い点



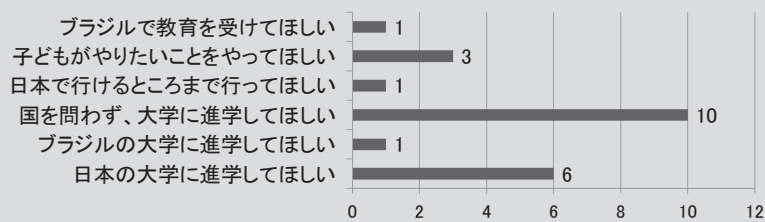
### 絵本の改善すべき点



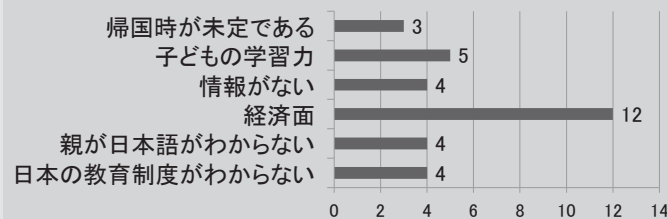
11

## 子どもの進学への期待(N=22)

### 子どもの進学への期待

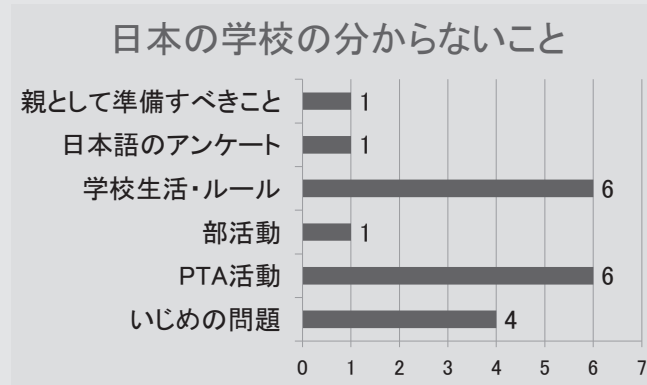


### 進学への課題



12

## 学校についてわからないこと(N=22)



13

## 保護者からの学生への質問

- ◆ いつから日本の学校に通っているのか。
- ◆ 高校に入学するためには試験があるのか。
- ◆ 浜松市の高校はどう選ぶべきなのか。
- ◆ 勉強方法はどうだったのか。
- ◆ 言語の運用能力はどうなのか。
- ◆ 大学の入試方法はどうなのか。
- ◆ 大学進学で困難だったことは何だったのか。
- ◆ 大学でかかる費用はどのくらいなのか。
- ◆ 奨学金制度はあるのか。
- ◆ 日本の学校でいじめを受けたことがあるのか。

14

## 学生たちの感想

父はとても教育熱心で子どもたちの将来のことをよく考えていそうだった。

非常に教育の意識が高いと感じた。子どもを手伝う体制が整っていて、素晴らしいと思った。

母は教育熱心で、日本の教育には好印象を持っている。子どももその影響を受けてか、進学に対して前向きな気持ちを持っている。

ブラジルへ帰りたい家族のせいか、そこまで訪問に興味をさなかつた。また、教育に関してもあまり熱心にならなかった。

15

## 家庭訪問から見てきたもの

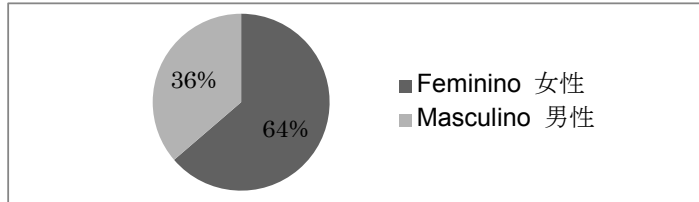
- ◆ 保護者33名のうち、大学進学を果たした保護者は約2割（大学を卒業したのは6%）だった。
- ◆ 子どもの進学を希望している保護者は約8割だった。
- ◆ 保護者：「工場で働く自分の姿を見せ、娘がそうならないように勉強するよう励ましている。」
- ◆ 日本での大学進学への課題：
  - ◆ 子どもの宿題（算数、理科、国語）を見てあげられない。
  - ◆ 大学でかかる費用（経済面）が心配。
  - ◆ 日本語がわからないため、子どもの進学について必要な情報を得られない。

16

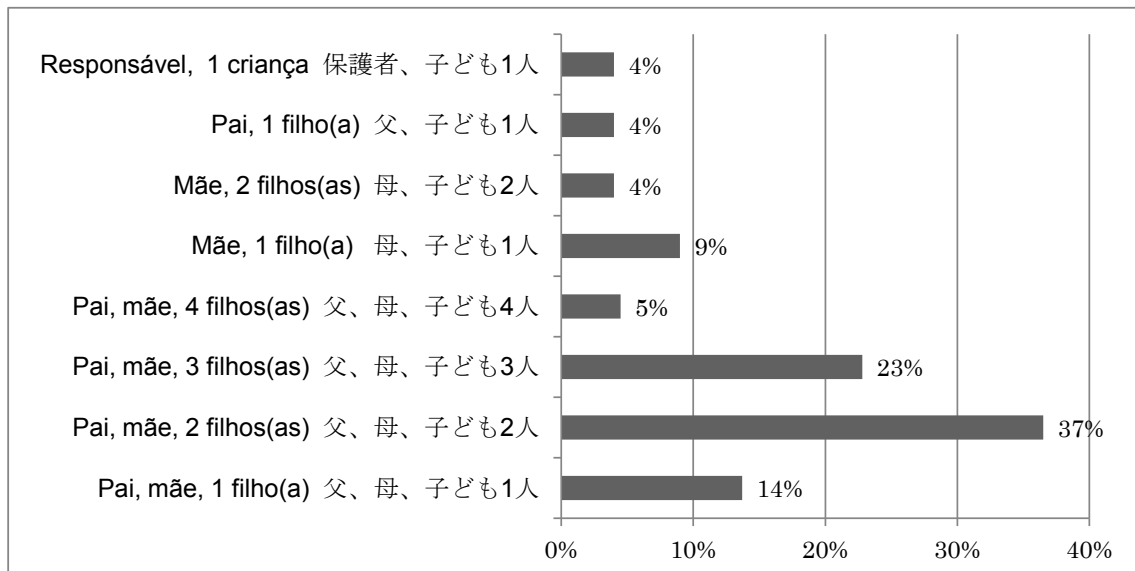
## 絵本プロジェクト 家庭訪問調査 集計結果

訪問家庭数	22 世帯	(※「N=22」は家庭数を表しています。)
回答者数	33 名	(※「N=33」は回答者数を表しています。)

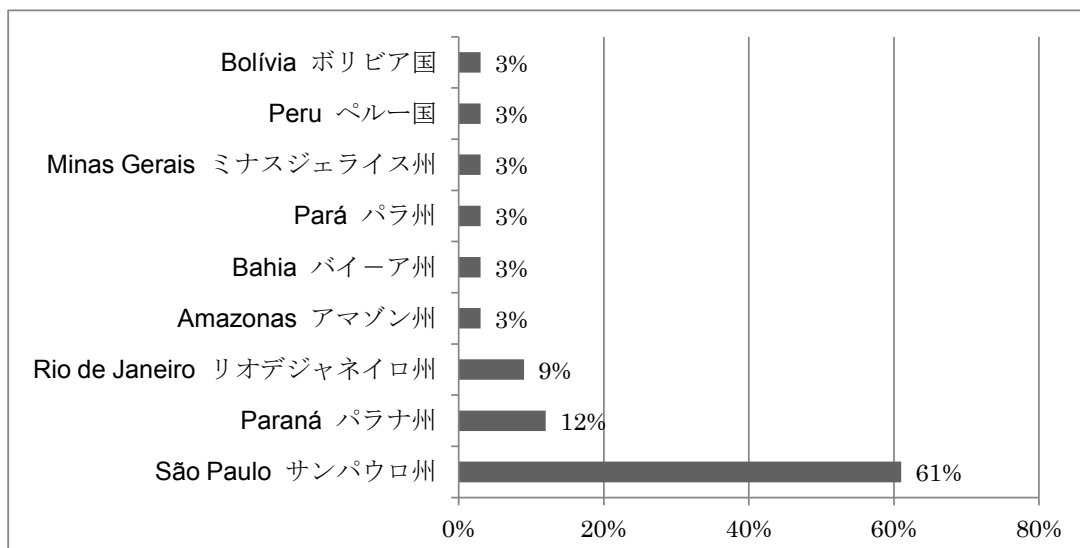
### 1 性別 Sexo (N=33)



### 2 家族構成 Configuração familiar (N=22)

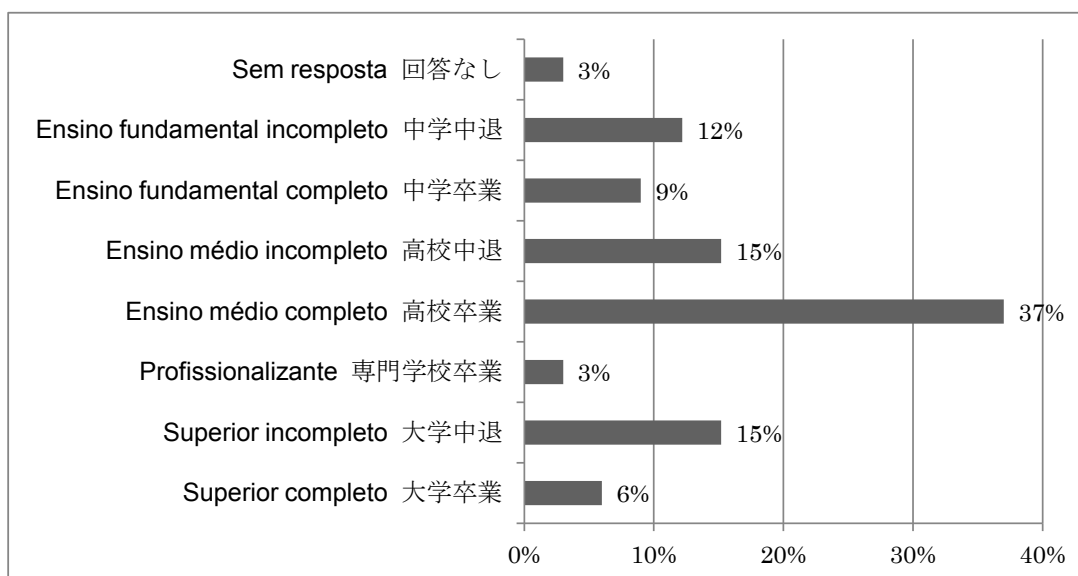


### 3 回答者の出身地 Local de origem (N=33)

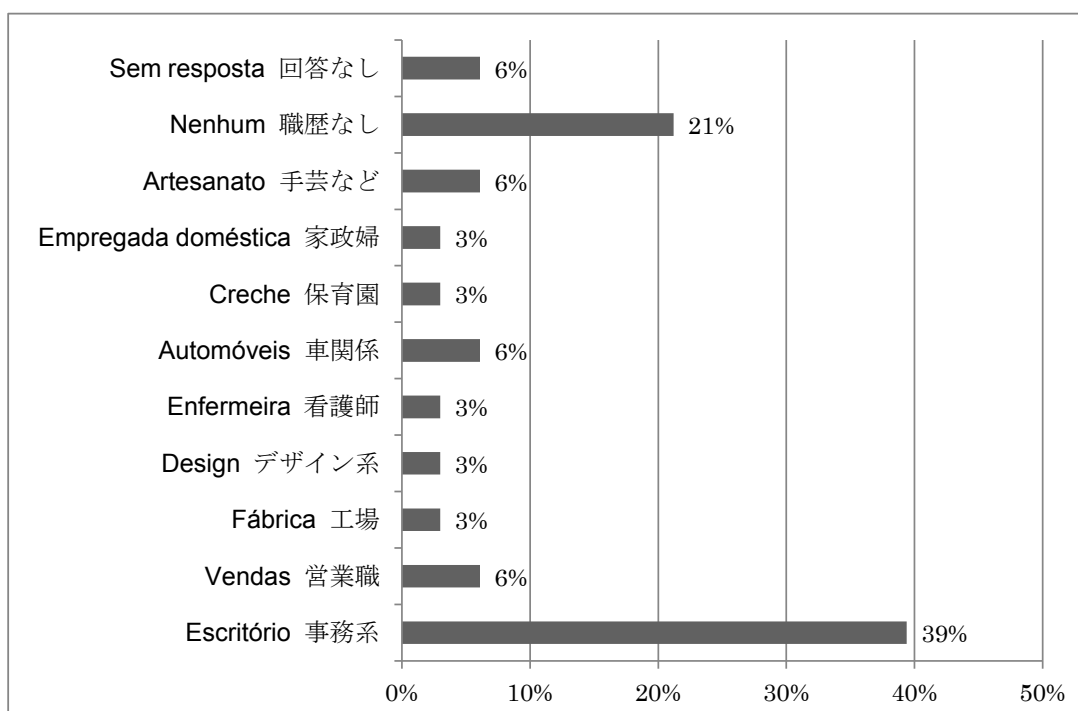




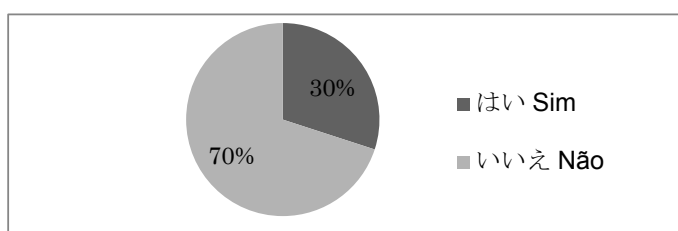
#### 4 回答者の最終学歴 Escolaridade (N=33)



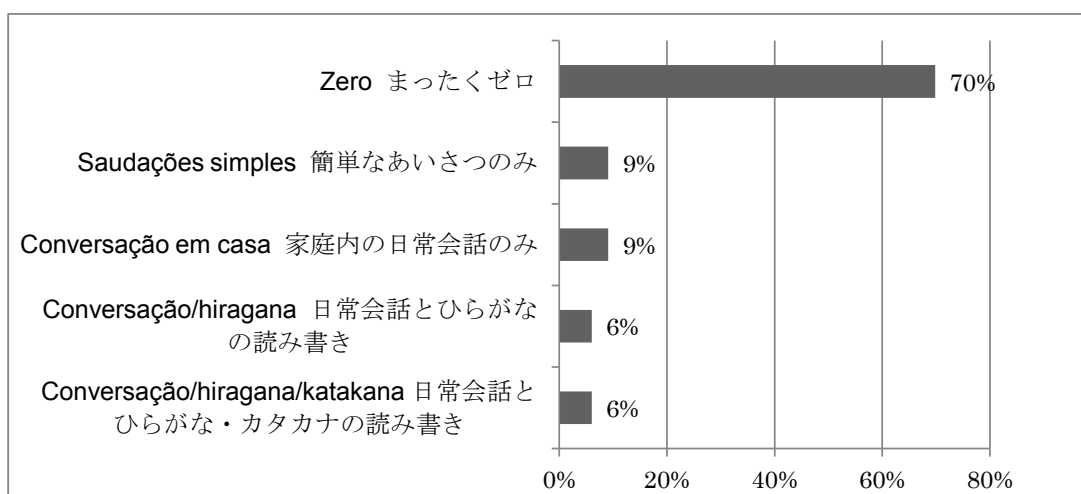
#### 5 回答者のブラジルでの仕事 Trabalho no Brasil (N=33)



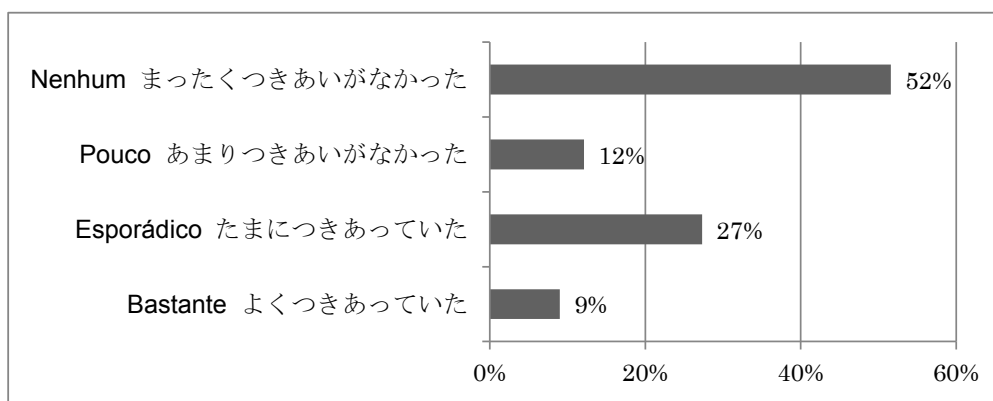
#### 6 ブラジルで日本語を学ぶ機会がありましたか。 Estudou japonês no Brasil? (N=33)



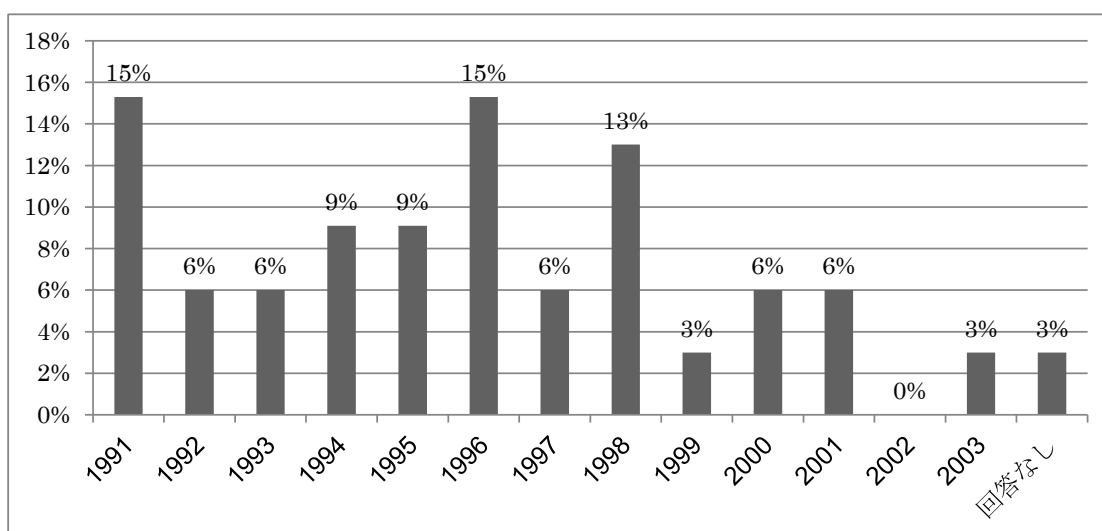
7 来日前の日本語力 Nível de japonês antes de vir ao Japão (N=33)



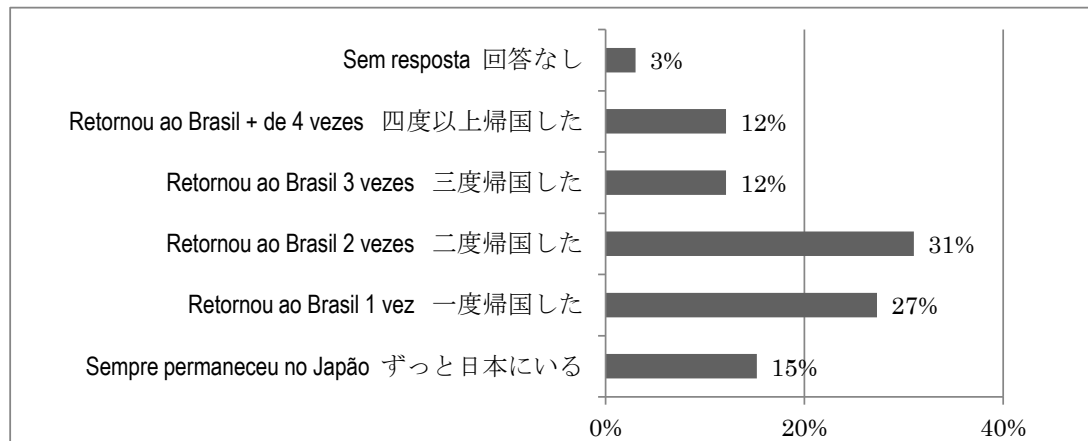
8 ブラジルでの日系人コミュニティとの関係 Contato com a comunidade nikkei (N=33)



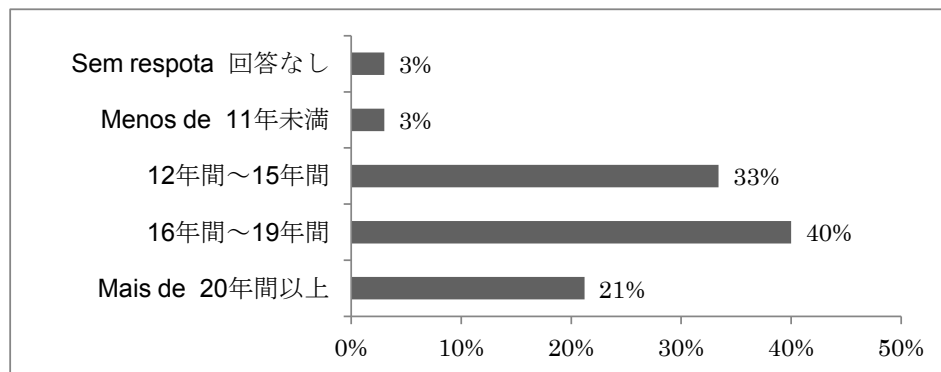
9 初来日 Chegada ao Japão pela primeira vez (N=33)



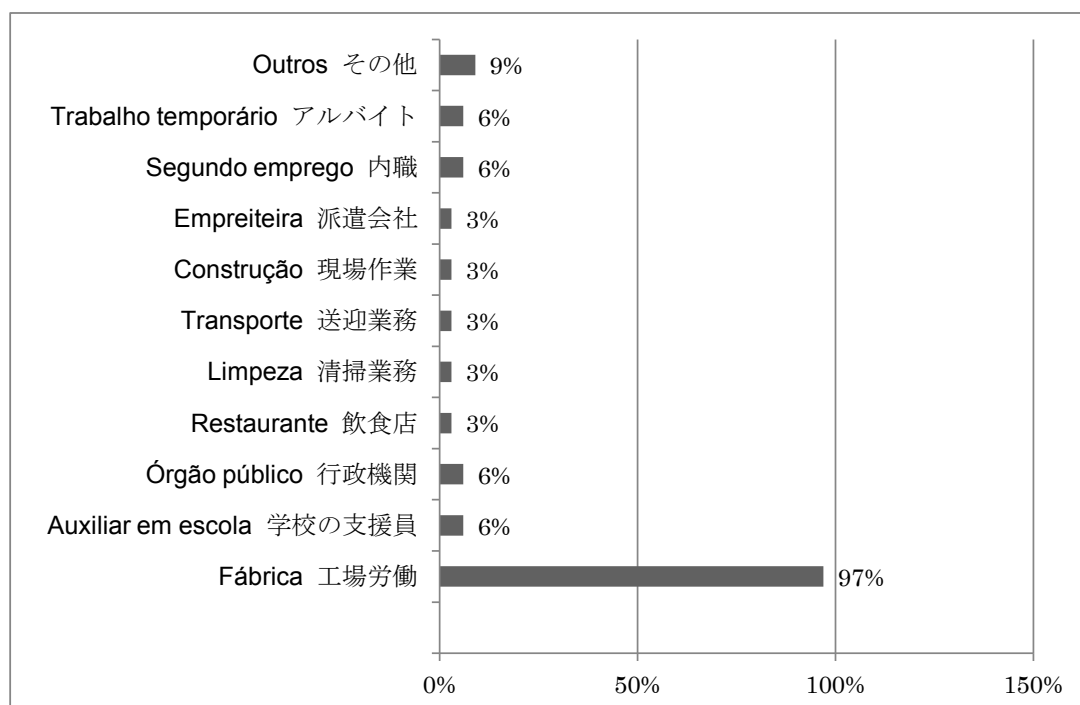
1 0 日本での滞在歴 Histórico de permanência no Japão (N=33)



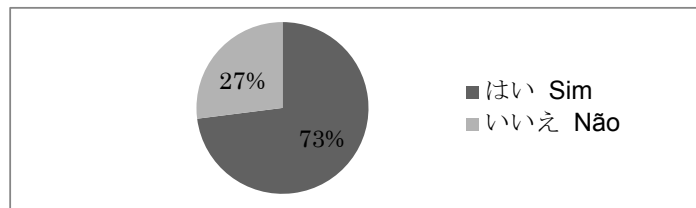
1 1 日本での滞在通算 Total de anos no Japão (N=33)



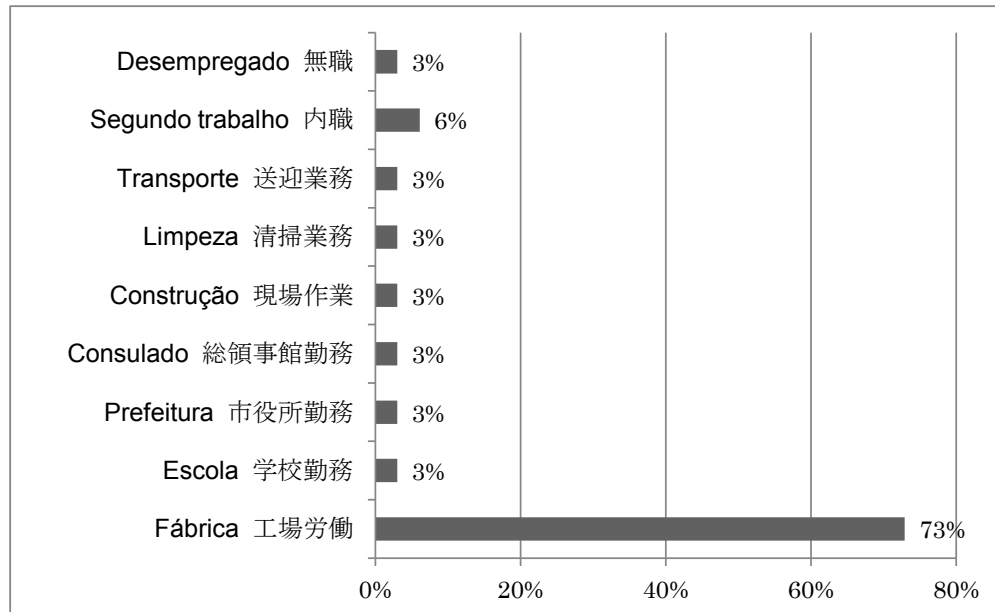
1 2 日本でしてきた仕事 Trabalhos no Japão (N=33)



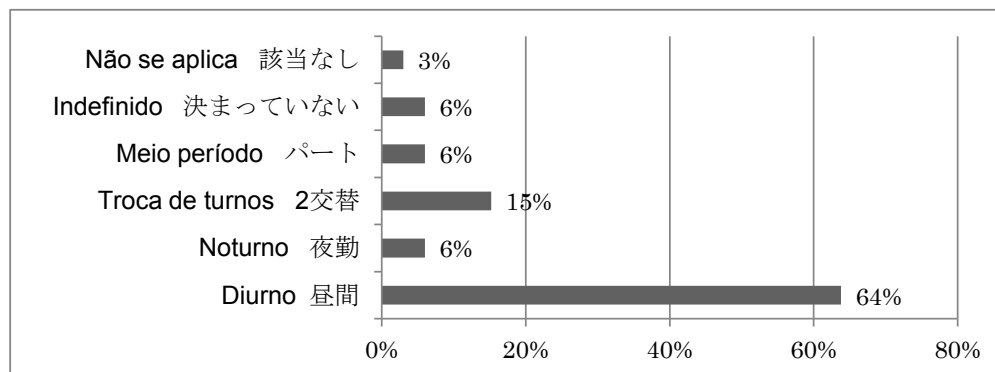
1 3 来日後は日本語を学習したことがありますか。Estudou japonês no Japão? (N=33)



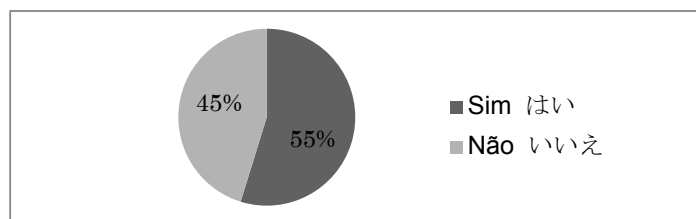
1 4 現在の仕事 Trabalho atual (N=33)



1 5 仕事の時間帯 Horário de trabalho (N=33)

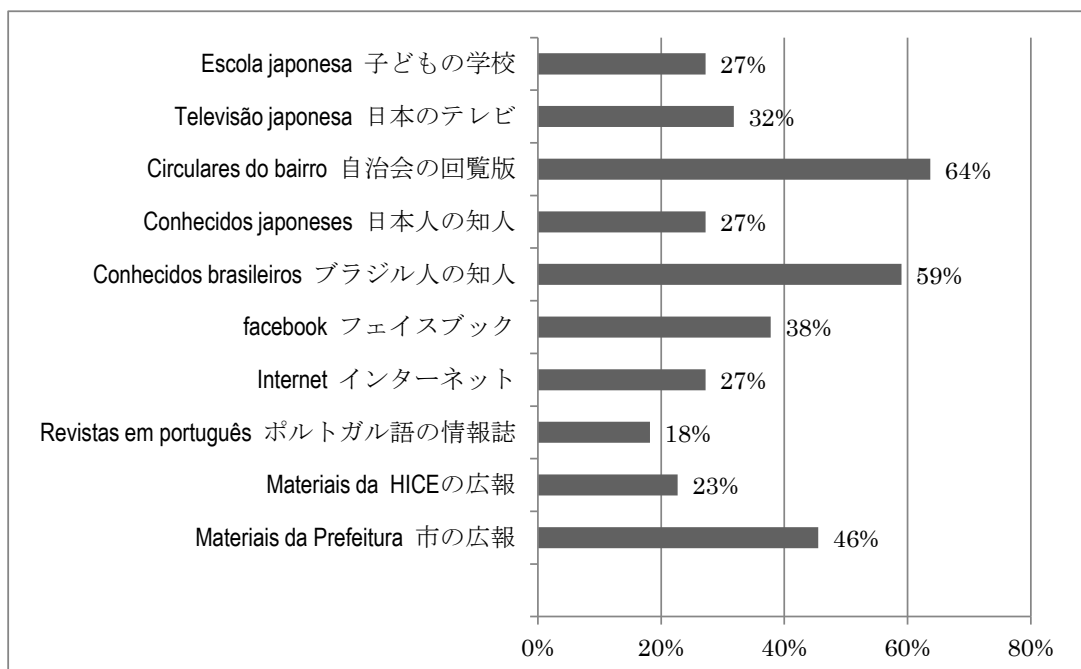


1 6 仕事以外の日本人の知り合いはいますか。Tem conhecidos japoneses? (N=22)

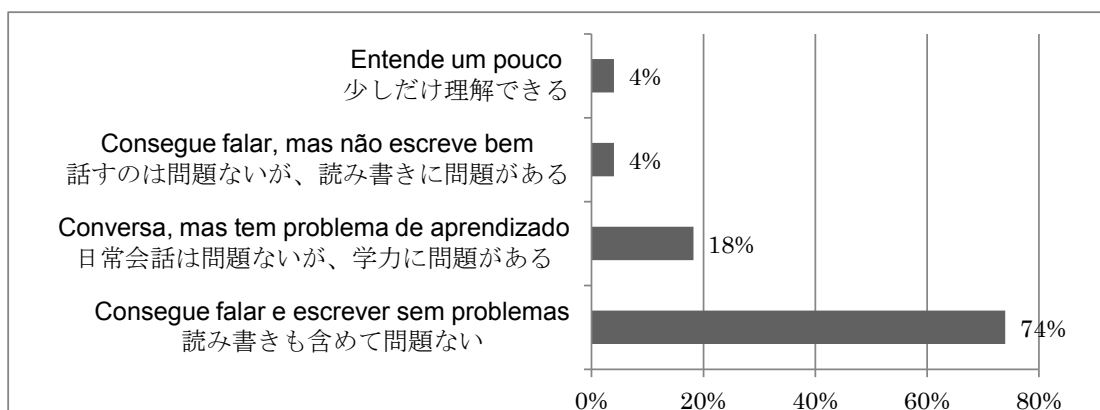




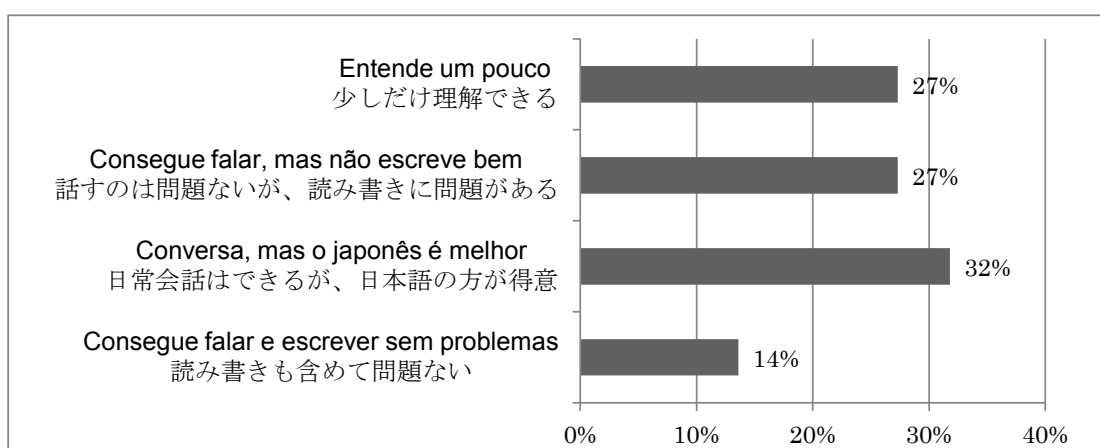
17 日本社会の情報源 Fontes de informação sobre o Japão (N=22)



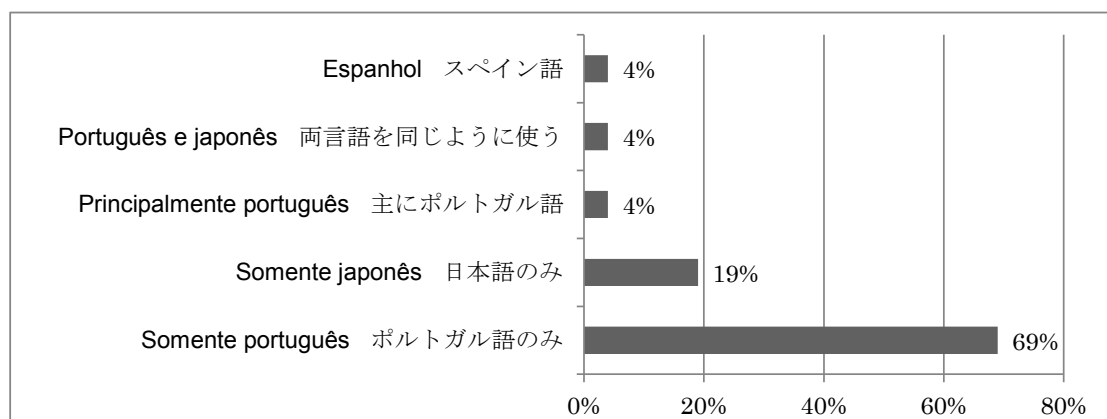
18 子どもの日本語力 Nível de japonês do(a) filho(a) (N=22)



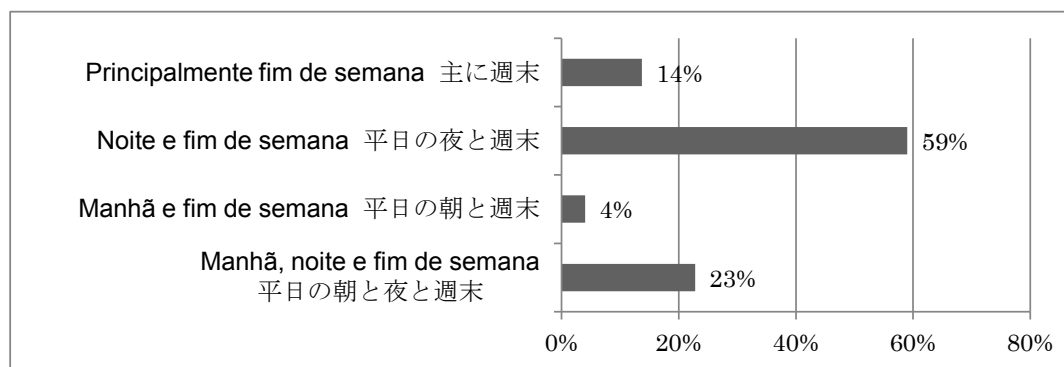
19 子どものポルトガル語力 Nível de português do(a) filho(a) (N=22)



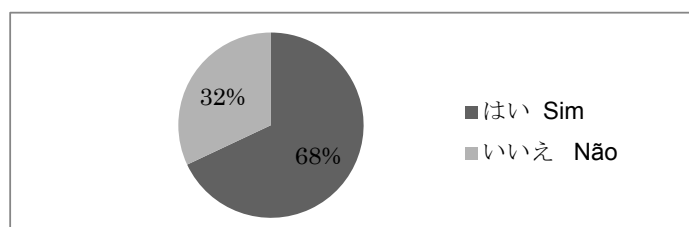
20 子どもと話す言語 Idioma em que conversa com o(a) filho(a) (N=22)



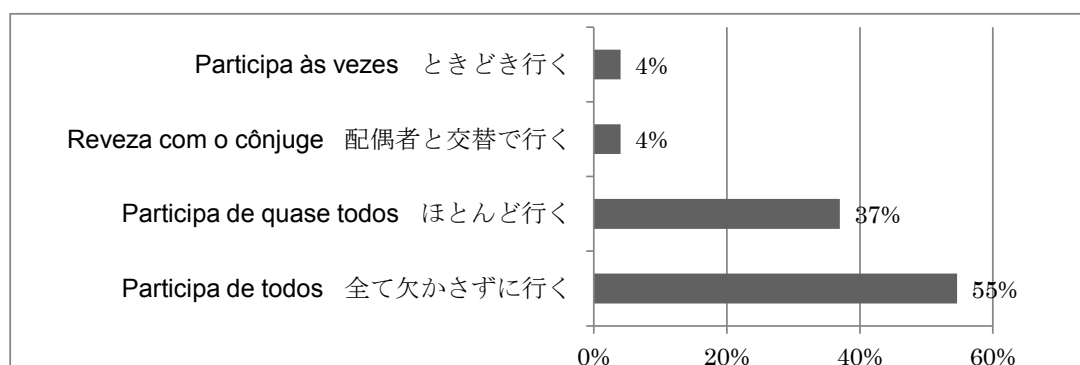
21 子どもと接する時間 Período em que se relaciona com o(a) filho(a) (N=22)



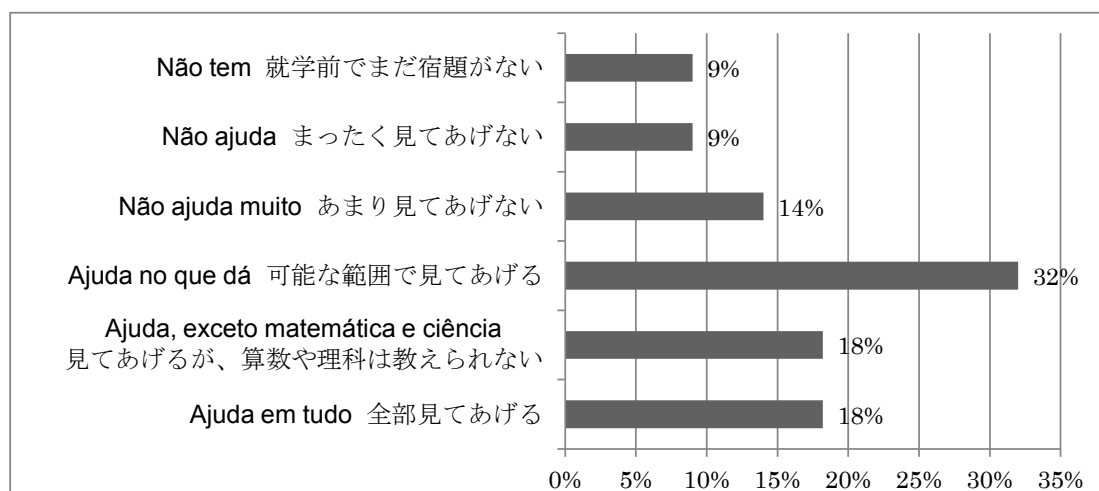
22 子どもに絵本を読んであげますか。Lê livros ilustrados para o(a) filho(a)? (N=22)



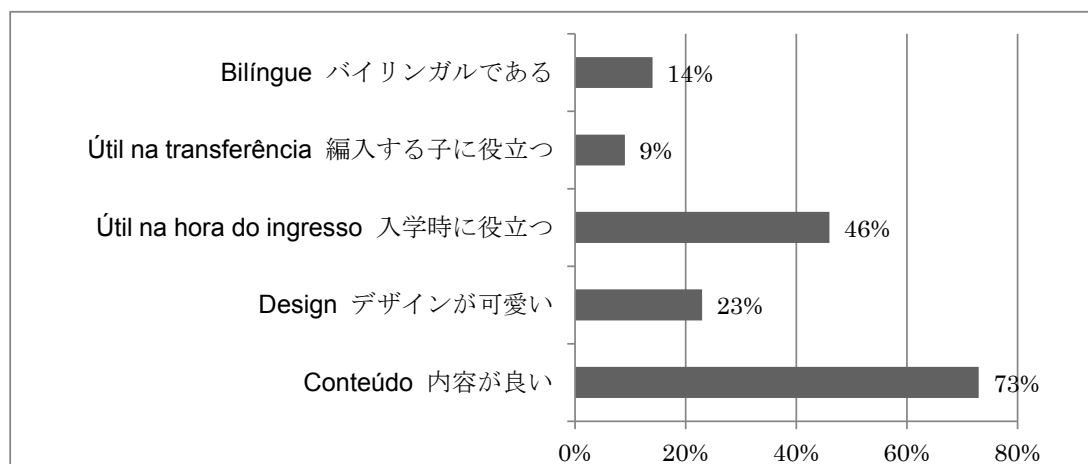
23 学校行事への参加 Participação nos eventos escolares (N=22)



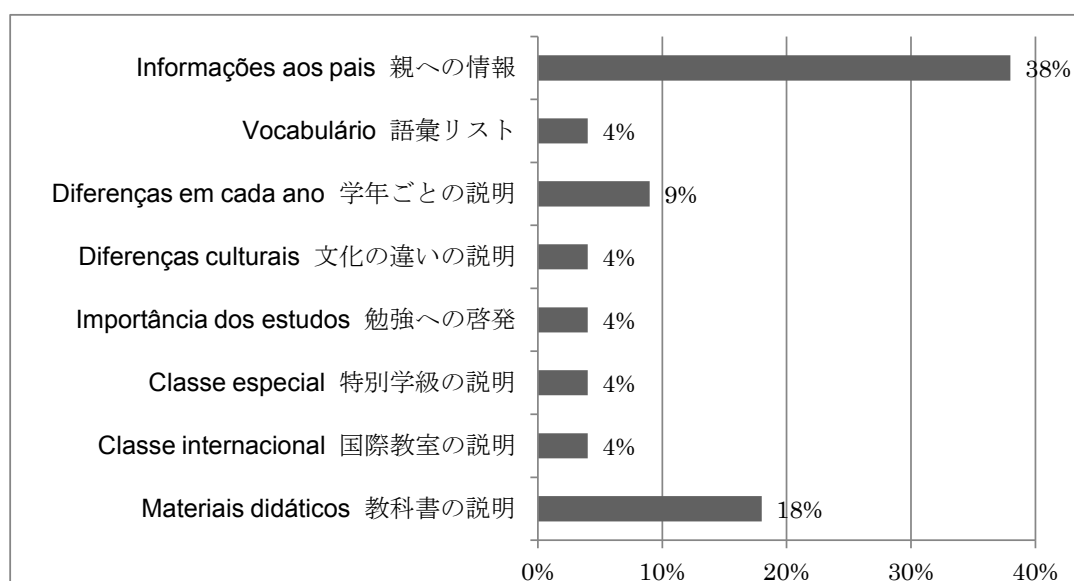
## 2.4 子どもの宿題 Tarefas escolares do(a) filho(a) (N=22)



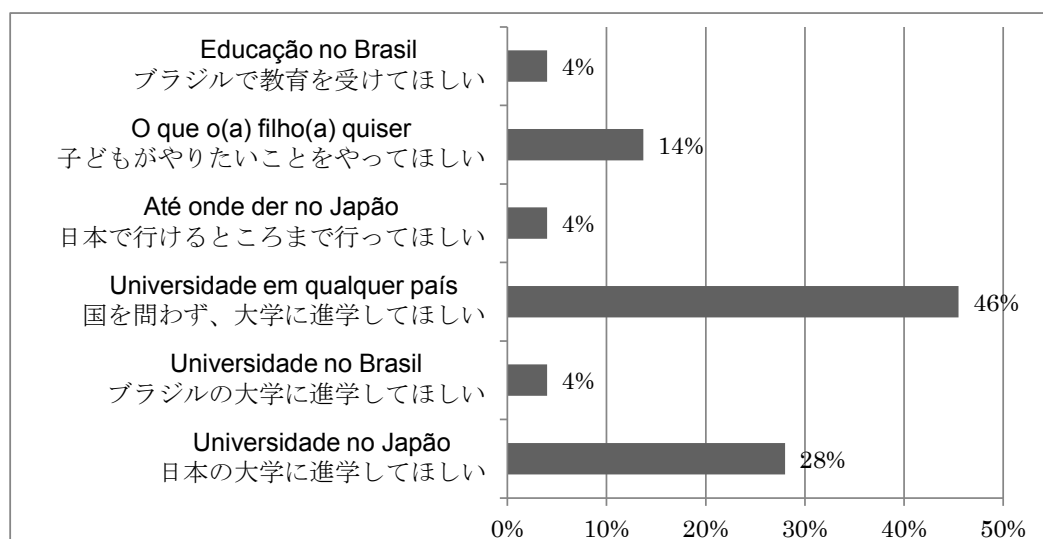
## 2.5 バイリンガル絵本の良い点 Pontos positivos do livro ilustrado bilíngue (N=22)



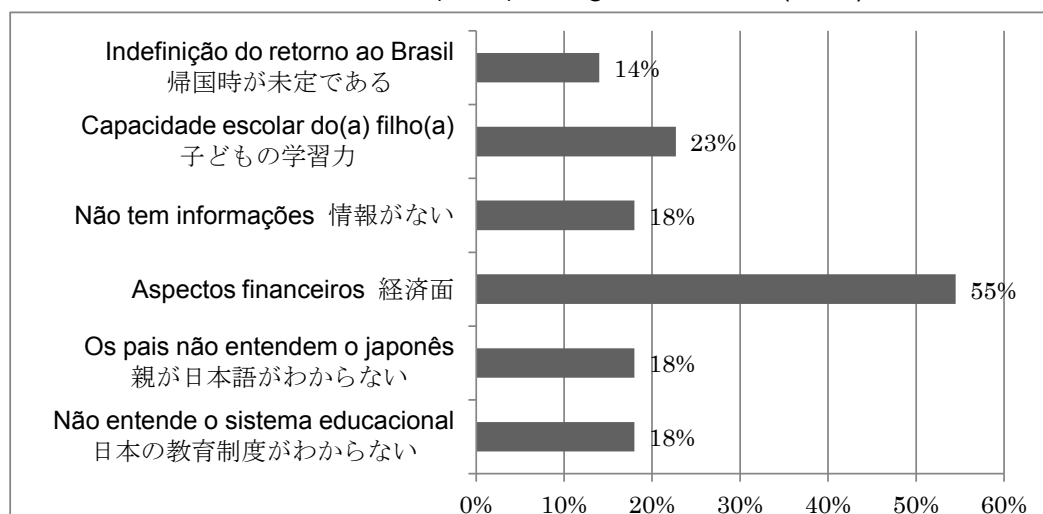
## 2.6 バイリンガル絵本の改善すべき点 Pontos para melhorar o livro ilustrado (N=22)



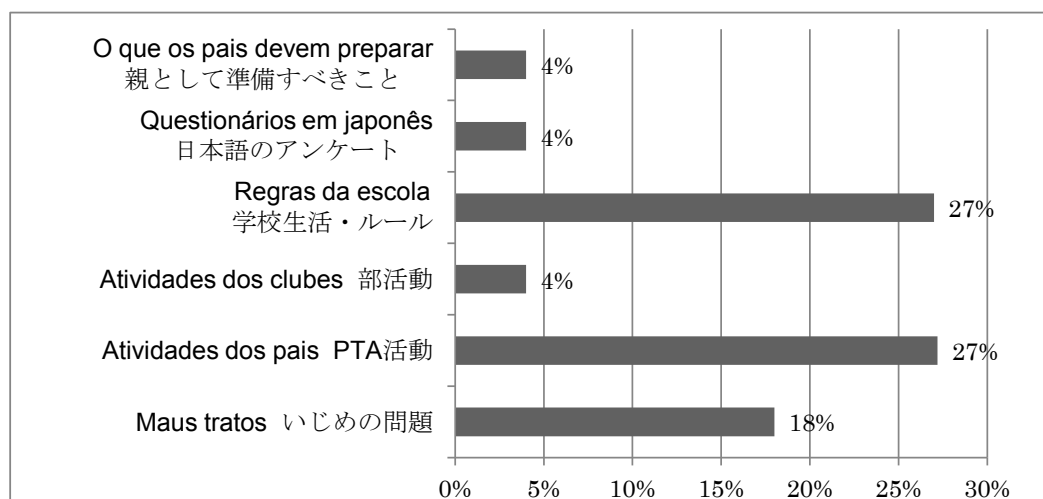
## 27 子どもの進学への期待 Expectativas em relação aos estudos do filho(a) (N=22)



## 28 進学への課題 Dificuldades para prosseguir os estudos (N=22)



## 29 日本の学校の分からないこと O que não entende na escola japonesa (N=22)







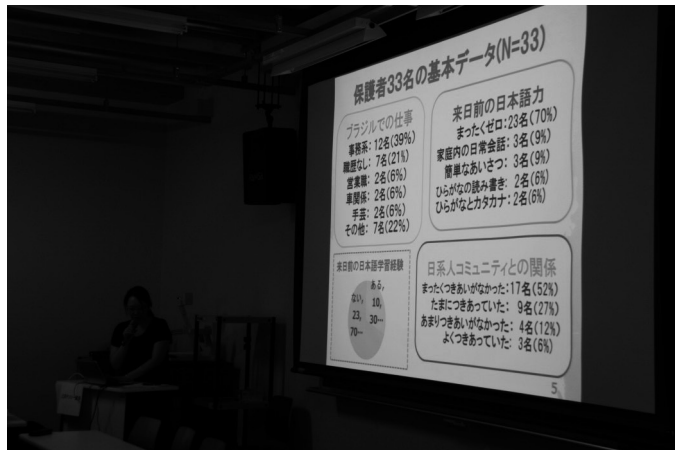
池上教授による趣旨説明



池上教授による趣旨説明



報告1: 上田准研究員



報告1: 上田准研究員



報告2: ブラジル人学生 宮城ユキミ



報告2: ブラジル人学生 宮城ユキミ



イシカワ准教授による進行



柳澤クリスティーナ氏と谷丸アンナ由貴美氏



全体討論



全体討論



会場の様子



会場の様子

## アンケートの自由記述から参加者の声

当日（参加者は約70名）

- ・多文化の背景をもった若い人材が多文化共生社会のために大きな力となるという視点が印象的。
- ・母語教育・・・親子が異なる文化的背景をもつことの大変さを想像するが、ディスカッションでいろんな側面の話が聞けたと思う。
- ・部活、PTAの話がおもしろかった。（日本人も同じ感想を持っている人もいます。）
- ・池上先生の熱心な説明、石川先生のスムーズな進行など素晴らしかったです。こうしたイベントにまた参加したいと思いました。皆さん、簡単に「教育」と言っていましたが、教育が高学歴を志向するものなのか、人として生きていくための知識、力を獲得するものなのか、少し考えさせられました。学校での勉強が得意ではない子どもはどうすればいいでしょうか？
- ・こういう会が開けて、これだけの人が参加するということ自体とてもうらやましい限りです。
- ・外国人住民の方は、子どもの教育について、多くの想いをもっていて、悩みもあるのだということに改めて感じた。情報提供をすることも必要だが、提供するだけで終わるのではなく、柳澤さんがおっしゃっていた「きっかけ」をつくっていくことも必要であると思った。実体験からのお話をきくことができ、勉強になりました。ありがとうございました。
- ・日本での教育についての問題のリアルなお話が聴けて、とても良かったと思います。質問の時間に浜松以外の地域の方も色々な立場の人もたくさんいらっしやっていて、多くの市民が関心を持って問題に取り組んでいる印象を受けました。
- ・乳幼児の親に向けての育児の絵本があれば良いなと思いました。日本の育児、ご自分の国の育児、どちらが良いという問題ではなく、日本の考え方を理解していただくと意志の疎通がうまくいくと思います。
- ・とても良かったです。地域も外国人も協力し合ってどんどん意見交換していけたらいいと思いました。Muito Bom!
- ・学生さん以外に保護者の「ナマ」の声を聞けたのは、大きな収穫だった。さらに、中学生以上、もしくは、先の進学を考えた上での保護者や児童生徒への「説明」や「心がまえづくり」をめざしたなんらかの「集まり」の機会を設ける必要をこちらの「考え」と保護者の方々との合致させた上で確認できたことは大きかったと思う。
- ・外国人の子供達が言語について再考した。今住んでいて生活している言語が母語子供の将来を見据て母語第2言語の選び方考えさせられる。

- ・おじいさん、おばあさんとの交流大賛成。
- ・保護者がロールモデルである同国にルーツをもつ学生に、聞きたい情報がたくさんあって、それが家庭訪問で実現したように今後に生かせる事何だったと思います。更なる企画に期待しています。
- ・とてもほのぼのとした雰囲気、中身も充実しており、大変勉強になりました。この種のフォーラムでは出色のものだったと思います。
- ・私たち日本人があたり前だと感じていることでも、外国人からしたら、理解できないことがたくさんあると分かった。もっとお互いにかかわり合って、お互いの文化を尊重することが大切だと思った。
- ・在日外国人の問題に関する浜松エリアの現在を知ることができる貴重な機会を提供していただき、ありがとうございました。この 20 年で、マジョリティによる支援体制や当事者の活動も増えてきましたが、外国にツールをもつ者のかかえる問題は基本的にかわっていないと思いました。自分自身、高校段階での教育にかかわってきましたが、何か形にできればと思います。どうもありがとうございました。
- ・当事者のお話しがうかがえたのがよかったと思います。ただ調査の回収率が低いので回答していない人々の動向が気になります。
- ・日本で生活することの困難さを感じることができました。子どもの教育について、就職について、それにとまなう経済のこと、多種多様ですが彼等のためにできるかぎりの支援が必要であると思いました。
- ・貴重なご機会をありがとうございました。
- ・大学と行政の協働がうまく機能していて素晴らしい実践だと思います。久しぶりに参加させていただきましたが、内容の充実したフォーラムで多くのことを学ばせていただきました。どうも有難うございました。
- ・部活のことや学校での通訳など、意外なところにも大変さがあるとわかり、今日はお話を聞けてよかったなと思いました。ありがとうございました。
- ・多くの体験談をきくことができました。本年度より、私自身も外国人児童生徒の教育に行政の側面から関わっており、今日は現状や課題を考えるよい機会となりました。今後もこのようなフォーラムに参加させていただきたいと思います。
- ・保護者の意見が聞けてよかった。子育てに関する課題がいろいろわかりました。
- ・今日のお話し、ブラジルの方たちも聞いてくれるといいのかなと思います。日本人も格差社会ですが、外国人保護者の認識もすごい格差です。



- ・生の親御さんの声、大学生の声が聞けてとても良かったです。また次回も参加したいです。それぞれの方の努力に感動しました。
- ・大変参考になりました。教育熱心な保護者の思いは国が違っても皆同じという感じがします。そうでない保護者の思いについても知ることができればいいとも思いました。
- ・保護者の方々へ、必要とされる情報が必要なタイミングで届いていないことを実感しました。また本日出席の方々のように、日本社会を理解しよう溶けこもうとしているわけではない方々への対策、その方々の実情も知りたいと思いました。最後に、私は日本人ですが、子育てを通算で15年間外国でした期間があります。国は個々の事情は異なっても、親がぶつかる問題には共通項が多いと改めて思いました。その時、柳澤さんと同じように「おじいちゃん、おばあちゃんが存在が我が家にはない」、また上田さんのように我子も「おとなになれば英語や仏語が話せると思っていた」と発言しました。
- ・以前、得ていた情報では日本に来ているブラジル人の親は教育への関心が薄いと感じていましたが、今日のお話しでちょっと見方がかわりました。これまで、日本に来ることが子どもたちにとってマイナスになることが、多い事例を見てきましたので、今日は良い話が聞けたと思います。ありがとうございました。
- ・勉強をがんばる気持ちがあるのなら、ぜひ全日制の高校へ。高校就職での正社員がどんどん出ています。求人が山ほど来るし、何よりも先生ががんばっています。高校で卒業する生徒も多いでしょうから、そちらにも目を向けて下さい。正社員をねらうなら全日制へ。
- ・このような内容を教員はもちろん、外国人保護者と共有や討論会を開くべきだと思います。現場、当事者が関わることで成果が見られると思います。（早くはできないかもしれないけど、実施する価値はあると思います。）
- ・外国籍の子どもたちの高校進学支援をしています。ふだん保護者の意見をきける機会があまりないので、良い機会になりました。
- ・興味深いお話をいろいろと聞くことができ、実りの多いフォーラムでした。ありがとうございました。外国籍の子どもたちの保護者の方々ももっと日本の学校教育に参加しやすい、したいと思えるような環境づくりも必要なのだと実感しました。
- ・私の育った京都は、観光客が多く、そうした外国人の方と接する機会はあるのですが、未だ様々な民族問題をかかえているにもかかわらず、生活者としての外国人の方を見ようという姿勢が欠けており、本フォーラムに参加させていただいた今、その事実を再度確認するに至り、改めて汗顔の至りであります。また、このようにして、「生」の課題、意見というものに触れられる機会を与えていただき、感謝しています。私の所属するのは言語学系の学部なのですが、いつかこれらの課題に向かう活動に資せるものを残せるよう精進してゆきたいと思います。





## 第8回 多文化子ども教育フォーラム

( *Forum on Intercultural Children's Education* )

# ブラジル人保護者は 何を考えているか

### ○プログラム

- ・報告1 上田ナンシー直美 (静岡文化芸術大学准研究員)  
「バイリンガル絵本プロジェクト」から見えてきたもの  
～ブラジル人大学生によるブラジル人児童家庭訪問調査報告～
- ・報告2 静岡文化芸術大学 ブラジル人学生  
「同じ背景を持つ先輩として家庭訪問をした印象」
- ・意見交換 進行 イシカワ エウニセ アケミ (静岡文化芸術大学准教授)  
コメント 柳澤クリスティーナさん、谷丸アンナ由貴美さん

### ○対象

外国につながる子どもの教育や関連する課題に関心のある方

2014.6.14 (土)

13:30～16:00

静岡文化芸術大学

南棟2階 南281中講義室  
浜松市中区中央2-1-1

お問い合わせ先

静岡文化芸術大学:池上重弘研究室

TEL/FAX 053-457-6156

E-mail fice2012@gmail.com

多文化子ども教育フォーラム

検索

参加無料  
申込不要

静岡文化芸術大学には日本人と同じ入学試験を突破して合格したブラジル人学生が10名以上います。

2013年度に実施した「バイリンガル絵本プロジェクト」では、ブラジル人卒業生が作った学校生活導入絵本が媒介となって、ブラジル人大学生たちによるブラジル人児童の家庭訪問が実現しました。

今回はそのプロジェクトの全貌を報告すると共に、家庭訪問調査の結果を紹介します。また、実際に家庭訪問した学生たちの声に耳を傾けてみましょう。

このフォーラムは2014年度 静岡文化芸術大学 学長特別研究(研究代表:池上重弘)  
「多文化共生をめぐる地域課題の解決に向けた実践的研究」による事業の一環です。

大学の入学方法などの質問を受けたことを話す宮城さん(右から3人目) 〓  
浜松市中区の静岡文化芸術大で



## 静岡文化芸大で教育フォーラム

静岡文化芸術大(浜松市中区)で14日、多文化子ども教育フォーラムがあり、日系ブラジル人の学生と研究員が浜松市内のブラジル人世帯を訪問して子どもの学校生活や家庭学習を調査した結果を教育関係者ら約60人に報告した。上田ナンシー直美准研究員は保護者が日本の教材が読めず、ブラジルと教え方が違うため、宿題の指導ができないことなどを話した。(木許はるみ)

- ・日本の教材読めない
- ・大学の入学方法は?
- ・日本語の覚え方は?

日系ブラジル人の静岡文化芸術大卒業生が、日本に住むブラジル人の子ども向けに作った小学校の行事などを紹介する絵本が、昨年九月から市内の小学校や家庭に配布されたのを機に調査が始まった。文化政策学部の池上重弘教授の研究室の学生ら六人が二二世帯を訪れ、保護者から聞き取った。フォーラムでは、小学六年の時に来日した三年宮城ユキミさんがブラジル人の保護者から、大学への入り方や日本語の覚え方などの質問を受けたことを語った。池上教授は「説明し、責任が大きい知識が得られるように、保護者が大学生に触れることができる機会を持つようにするのが重要だ」と訴えた。上田准研究員は教える方が違う問題のほか、高校の選び方や奨学金の情報が伝わっていないことを説明した。参加した小学生や高校生の子を持つブラジル人保護者は、PTA活動などへの戸惑いを話した。谷丸アンナ由貴美さん(四七)は「部活動が受験に影響するとは知らず、子どもの進路に影響を与えてしまった」と話した。子どもが日系人の新入生の質問を受けたことを通訳を任せられることを説明し、「負担が大きいくて責任が重い」と訴えた。

# ブラジル人家庭を調査

## 浜松・遠州

浜松・報道部  
053(421)6036  
(FAX)  
053(421)5218  
掛川支局  
〒436-0027  
掛川市久保  
1の5の3  
0537(24)4358  
(FAX)  
0537(24)5133  
袋井通信部  
〒437-0022  
袋井市方丈  
6の9の17  
M'Sアパート  
0538(42)3416  
(FAX)  
0538(45)0015  
磐田通信局  
〒438-0071  
磐田市今之浦  
2の7の13  
0538(32)6405  
(FAX)  
0538(39)0022  
菊川・御前崎通信部  
〒437-1514  
菊川市下平川51の1  
マーブルC号棟  
0537(73)5533  
(FAX)  
0537(73)5578  
購読のお申し込み  
0120-139-739  
広告のお申し込み  
053(421)9118  
折り込みのお申し込み  
053(466)0547

---

第8回多文化子ども教育フォーラム  
ブラジル人保護者は何を考えているか  
報告書

2016 年 2 月 印刷発行

編集

池上重弘、イシカワ エウニセ アケミ、上田ナンシー直美

発行 静岡文化芸術大学

430-8533 浜松市中区中央 2 丁目 1-1

TEL (053) 457-6156

FAX (053) 457-6156

Email: ikegami@suac.ac.jp

印刷 オオゼキ写真印刷株式会社

433-8111 浜松市中区葵西 2 丁目 5-20

TEL (053) 436-1956

FAX (053) 437-6095

---

